国富町文化財調査資料

第２集

昭和５７年３月

国富町教育委員会

総　目　次

1.　文化財調査 …… 1

はじめに …… 1

調査の概要 …… 2

2.　高田原地下式横穴発掘調査報告 …… 24

3.　六野原地下式横穴発掘調査報告 …… 45

I　文化財調査

寺原俊文

はじめに

国富町が企画して実施中の町内文化財委皆調査は，現在，各地区に調査協力員を町から委嘱して生活の周辺に存在する文化遺産の発掘に鋭意努力が払われている。その趣旨は第一集に示したとおり「町内にはかなり文化財が遺存し，指定文化財も七件をかぞえ未指定のなかにも保存価値のある文化遺産が各地区に残っていると思われる。とくに，生活の近代化に伴い，古い生活用具は散逸滅失し遺跡も破壊寸前の状態。この際，町内の文化財の再調査を行って文化遺産の現状を確認して記録で保存し，あるいは町の歴史を確認する重要な文化遺産は文化財として保護措置を講ずる」というものである。各地区の文化財調査協力員のご努力で相当数の民具その他一般文化財が確認されているが，詳細な調査記録，他地域との比較，保存価値など検討を要する物件も多数見られる。

今回も主として，石造文化財の記録を重点にとりあげているが，石造文化財は紙に残る古文書，古記録に比べて郷土史研究上に極めて重要な資料性を備えているということもある。形態から見る過去の社会背景もその一つであり石造文化財の価値はその多くが最初からの位置におかれているというところにもある。町内にはまだ数多くの石造文化財が残されている。郷土という特定地域社会の歴史を研究するには，金石文が最高の資料性を発揮してくれる。応永，天文，永禄，天正という中世の石造物が現位置に残っているということは町の歴史の流れの中に，中世からの繁栄を想像させる。藪の中に転がる石塔の破片にも，ある時代のその地域の経済，宗教，芸術文化の実態と移り変りを物語ってくれる。今回は町の文化財指定に併せて調査した法華岳薬師寺石塔群ならびに義門寺石塔群が中心となったがその他の文化財についても資料を温存して民具の一覧とともに記録にとどめる作業をすすめつつある。

調　査　の　概　要

① 板　碑

国富町大字八代北俣　尾園

高　さ　　１０４糎

尾園の竹林の中に半切した板碑を並べて建てている。塔身の下部から右上方５３糎，同じく左上方４５糎の線から半切している。頭部に山形をつくり，その前面は額に連り，額前面に二条の横線を引く。

額の中央に径１８５糎の円相を刻む。厚さ１９糎

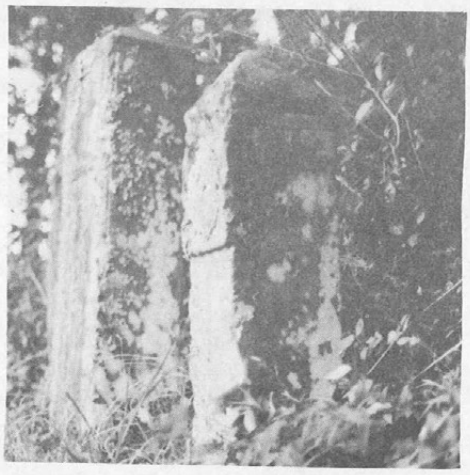
銘文は，身部に

干時天正七年八月彼岸

奉読誦大乗妙典一千部供養　明雪明鏡也

施主　　福島佐渡介秀安等

② 板　碑



国富町大字八代南俣門前

高　さ　　１０１糎

山形の高さ１７糎，前面は額に連り，額前面に二条の横線を引く。

額の出は１５糎，その下の身部の部分高さ５３糎ある。碑の形は２６糎縦，横の正面角柱につくっている。

銘は，身部に

干時　永禄五年壬成

奉読誦法華妙典一千部

旦那　福島将監永具併

とある。１６世紀中葉（１５６２）の造塔である。

③ 鰐　口

所在地　国富町大字八代南俣門前

氏蔵

鋳銅製　径１６糎

鰐口は扁平円形をして，鉦鼓を二つ合わせた形に似ている。神社仏閣の軒先にかけて布縄を垂らし，参詣人は，この緒を振って鼓面を打ち鳴らして礼拝した。

この門前の鰐口は，鼓面径１６糎，肩幅４糎，鼓厚５糎，撞座径 3.5糎，耳長３糎，耳穴径１糎である。

鼓面は銘帯，中区，撞座の三区に分ける。

撞座は２重圏の中に八葉の三角文を鋳出している。

中区に左右対照の蓮花文を細線で陽鋳する。銘帯は無文無銘である。他の鼓面は圏線のみ鋳出して，面の周囲を取り巻く縁は二圏，銘帯と中区を画するに三圏，撞座部二圏となっている。

④ 板　碑

国富町大字八代南俣大坪

高　さ　９５糎　　凝灰石

山形の頭部高さ１０糎，額の高さ２７５糎，身部巾３２糎。

銘に

施主　福島佐渡介

奉読誦大乗妙典一千部供養　先租

豈天正十六年戊子初冬吉祥日敬立

⑤　洲浜松竹双鶴鏡　一面

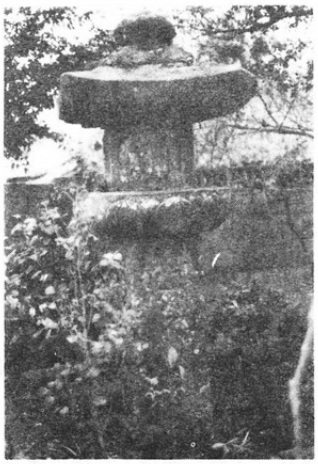
国富町八代北俣　　氏蔵

径 11.3 糎

鏡背文様は，波の打ち寄せる洲浜に大きく枝を.はった松と竹を配し，左手に双鶴が立っという洲浜形式で，縁は直角中縁。界圏は細線単圏で鈕は亀鈕。亀鈕と双鶴の三者が接嘴して,室町後期に固定化した文様の特徴をあらわしている。八代北俣　氏宅から西南約２００ｍの地点に往古，松樹があり里人はこの松を鏡松と呼んでいた。その松が約１００年前に枯死し，その根元からこの鏡が発見されて代々　家で保存されたものという。

現在，鏡松があったという所に，五輪塔などの石塔残片も見られる。

⑥　六地蔵



国富町大字本庄十日町　宝光寺境内

台石を２段に置く。竿石高さ１０５糎，巾３６糎，中台高さ２０糎，六地蔵１辺巾２５糎，高さ３２糎，笠石に二重棰をつける。

宝光寺は，真宗西京仏光寺の末派（日向地誌）で，本尊阿弥陀如来像は室町時代の作と伝えられる。

万福寺，義門寺とともに，本庄台地に建つ古刹である。

銘は塔身に

奉造立六地蔵塔一宇事右志者

幻阿弥陀仏妙蓮禅定尼

頓証大菩提　永禄九年丙寅

（各面四方梵字）

檀那安部定秀同氏女現世安隠後生善処故　而己

三月十三日　施主　敬　白

⑦ 板　碑

国富町大字本庄六日町　地蔵塚

高さ　１０８糎

六日町の旧道沿いに，地蔵塚と呼ぶ古墳があり，そこに地蔵堂が建てられているが，堂の東面庭に板碑がある。山形頭頂部から額との接点まで高さ１５糎，額の高さ１７糎，巾３２糎，身部に２糎の切込みをつくる。身部の高さ７１糎，側面巾１８糎である。

銘は，身部に

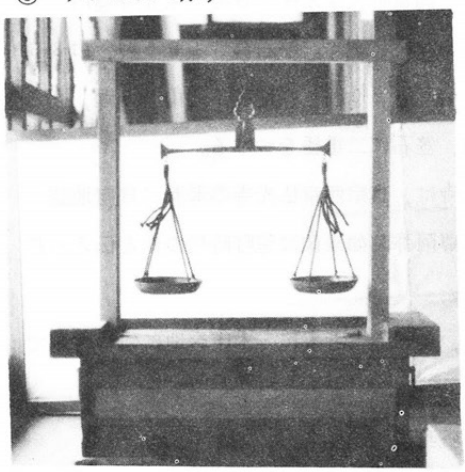
現世安隠妙永禅尼　干時天文十四年巳巳

奉読誦大乗妙典一千部供養

後生善処為口阿弥陀仏 三月十五日　敬白

とある。

⑧ テンビンバカリ



国富町大字本庄六日町

氏所蔵

高さ　約６０糎

格（桿）の長さ３６糎、皿径１５糎、深さ2.5糎、分銅もともに遺存している。分銅のなかに壬申と刻したものがあり、この秤を使用したと思われる年代から干支をさぐると、文化九年（１８１２）につくられたものであろう。本庄六日町附近は、幕領時代、商業の中心地として栄え、豪商が軒をならべていた所で、とくに文化、文政の頃はその極に達していたという。このテンビンバカリは、その豪商の一つ、和泉屋で使用されていたものである。

法華岳薬師寺石塔群

法華岳薬師寺は，東諸県郡国富町大字深年４０７０番地にある。寺域は法華岳の中腹にあって景勝の地としても恵まれた環境にある。

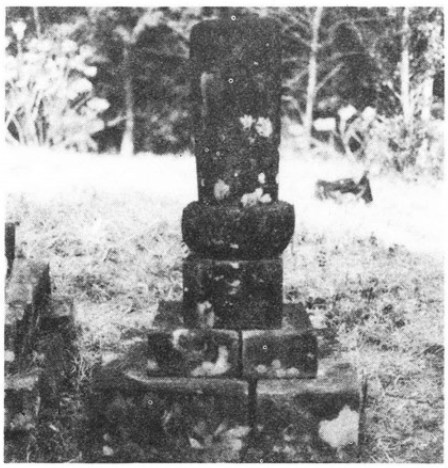
寺域の北端に，歴代僧侶の墓塔と考えられる無縫塔を主として，宝塔，五輪塔が整然と並んで建立されている。

一号塔　無縫塔。総高９２糎，塔身の最大径３４糎，高さ７４糎，底径３０糎，基礎の上に塔身を置く。

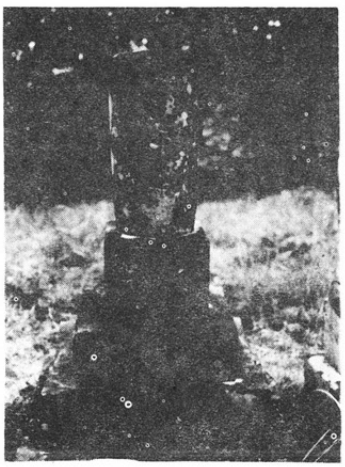
基礎は高さ２３糎，巾各４６糎で，正面に巾３１糎の格狭間をつくり，蓮弁を陽刻している。基礎の下に三段の基台を置く。塔身正面に「禅芳」，向って左側面に「天保十二年辛　四月十八日」と銘を刻している。

二号塔　無縫塔。総高９２糎，塔身の最大径２３糎，底径２０糎，請花高１５糎，上面径３８糎，底径２２糎。基礎は高さ２１糎，巾３６糎の方形，基礎の下に三段の基台を置く。塔身正面に「実応塔」，向って右側面に「文政十二巳丑六月十八日」と刻銘している。

三号塔　無縫塔。総高１００糎，塔身の最大径２５糎，底径１９糎，請花高１６糎，上面径３７糎，底径２５糎，基礎高さ１８糎，塔身正面に「泰長」，向って右側面に「享和二壬戌年」左側面に「十一月十五日」と刻銘している。基台は二段とする。



四号塔　無縫塔。１０１糎，塔身の最大径３０糎，底径２６糎，請花高１８糎，上面径３６糎，底径２７糎。基礎高２２糎，巾３３糎基台は二段とする。本塔の銘は，塔身正面に「普汰」と刻む。裏側に「寛政六年甲寅八月二日」とある。塔身頂部は水平に削る。



五号塔　無縫塔。総高９３８糎。
塔身の最大径３３糎，底径２７糎，請花を略して基礎の上に塔身を置く。基礎の正面に格狭間をつくり，池水にさく蓮花を陽刻している。
銘は塔身正面に，「崑山」，裏面に「当山二十三世　寛政四年壬子七月四日廷化」
「俗寿五十四歳」とある。塔身頂部はゆるやかな曲線をえがく。

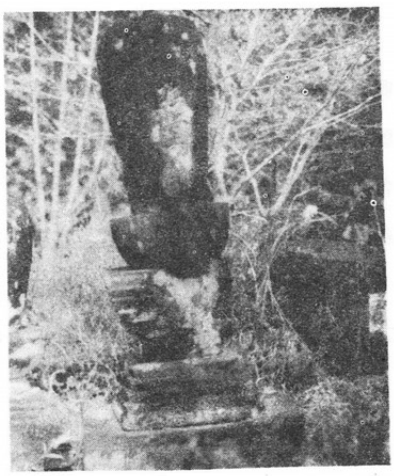
六号塔　無縫塔。総高９１糎，塔身の最大径２７糎，底径２０糎，基礎の高さ２９糎，基礎の上部３糎の高さに，単弁８葉の反花を刻出し，その上に塔身を請ける。塔身正面に「当山二十一世大棟□大和尚」の銘を刻む。塔頂約３分の１の所に塔身の大径があり，側線は滑らかに下向する。

七号塔　無縫塔。総高１１３糎，塔身高７１糎，底径２７糎，請花高１４糎，上面径４３糎，底径３０糎，基礎高５３糎，巾５９糎塔身正面に「実翁塔」の銘がある。

八号塔　無縫塔。総高１４４糎，塔身６１糎，底径３０糎，請花高１５糎，上面径４３糎，底径３０糎，反花との間に高さ１２糎，各辺３０糎巾の６角柱をつくり，その下に反花座，高さ１３糎を陽刻する。基礎の高さ６８糎，銘は正面に「江洲」，右側面に「寛保二壬戌歳」，左側面に「八月三日」とある。

九号塔　無縫塔。総高１２５糎，塔身高５７糎，大径２５糎，底径２０糎，請花高１６糎，上面径３５糎，底径２５糎，基礎高５２糎，請花の下に反花を置く。反花の下段に一面巾２４糎の四角柱をつくり，正面，右，左面に剣菱文を陽刻，その下段に高さ２４糎，１面巾４０糎のの基礎を置き，正面，右，左面に格狭間をつくり，それぞれに植物文を陽刻している。銘は塔身正面に「霊谷」，裏面に「干時正徳四年甲午十二日」とある。

十号塔　無縫塔。総高１３４糎，塔身高６６糎，大径３０糎，底径２３糎，請花高１６糎，上面径４１糎，底径２７糎，基礎高５２糎，基礎の上半部分に八角柱を置き，反花をのせる。銘は塔身正面に「保厳」とある。



十一号塔　無縫塔　総高１２７糎，塔身高５９糎，塔身の最大径３３糎，底径２３糎，請花高１８糎，上面径３６糎，底径２８糎，請花の下段に中台と見られる方形五段，高さ２０糎で下方内側に傾斜する。竿は高さ１０糎，一面の巾２６糎の方柱，その下段に上段と同じく方形五段，高さ２０糎の基礎が中台と逆に最下段一面４５糎の巾から上部に傾斜する。その下に各辺７０糎方形の基壇を置く。銘は塔身正面に「樵堂」とある。

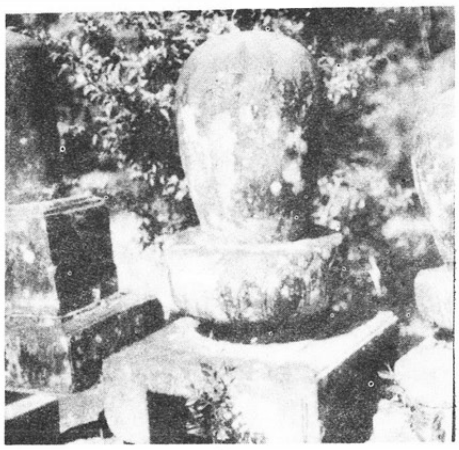
十二号塔　無縫塔。総高８８糎，塔身高４９糎，大径３０糎，底径２３糎，請花高１４糎，上面径４２糎，底径２５糎，基礎高２５糎，巾５２糎。銘は正面に「慈堂」とある。塔身は卵塔で，塔身の高さと最大径が接近して形が美しい。

十三号塔　無縫塔。総高１０３糎，塔身高５４糎，大径４０糎，底径３０糎。請花高１９糎，上面径４８糎，底径３０糎。基礎の高さ３０糎，方形で一面の巾７１糎。銘は正面に「口堂」とある。塔身は卵塔で塔身の高さに比して径が長く，美しい流線形につくっている。

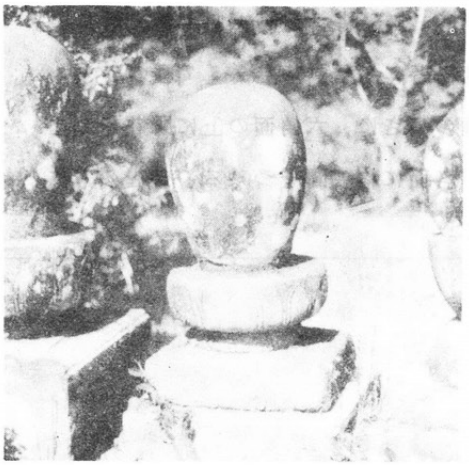
十四号塔　無縫塔。無縫塔８９糎。塔身高５３糎。大径３２糎。底径２７糎，請花半壊しているが，高さは１６糎，基礎高２０糎，径６２糎の四面。銘は塔身正門に「復安」とある。

十五号塔　無縫塔。総高９９糎，塔身の高さ５３糎，底径３０糎，基礎高２０糎，各辺長（方形）６１糎。銘は塔身正面に「年室」とある。卵塔の線が美しい。

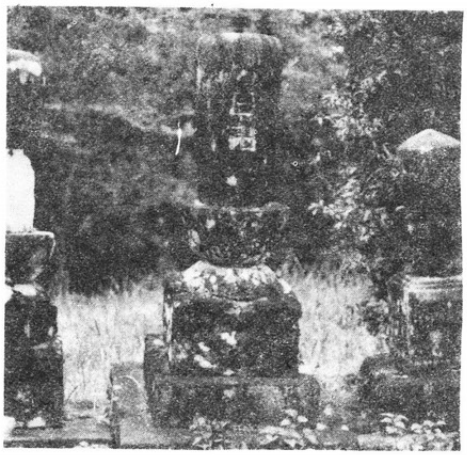
十六号塔　無縫塔。塔身は卵形でなく，高さ４２糎，径最大で４８糎，底径３２糎の太鼓形の塔身である。請花高２３糎その下に反花高さ１８糎と基礎（方形）が置かれる。銘は塔身正面に「単参」とある。



十七号塔　無縫塔。総高８７糎，塔身高５０糎，大径３３糎，上面径４５，底径２７糎，基礎高１５糎，各辺長（正方形）５０糎，その下に基壇を敷く。刻銘なし。流線型の形のよい卵塔。

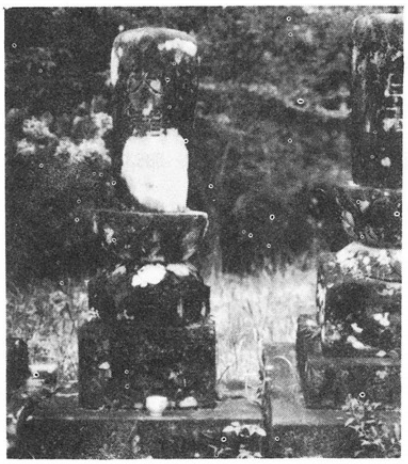


十八号塔　無縫塔。総高１２３糎，塔身高６４糎，大径４０糎，底径３０糎，請花高３２糎，上面径５３，底径３４糎，基礎高２７糎，正方形で一面巾７３糎，形の美しい卵塔。銘は「当山七世」「東岳理天大和尚」とある。

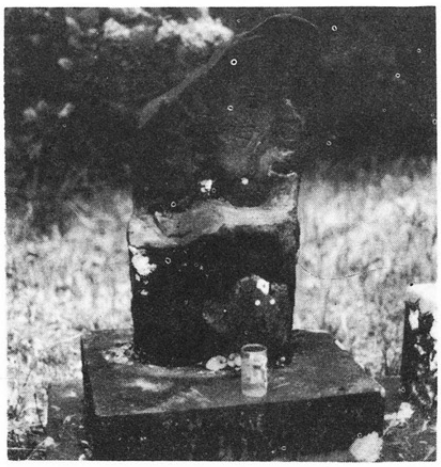


十九号塔　無縫塔。塔身高６０糎。大径２６，底径２０糎のほぼ円柱の塔身。下に基礎，基壇を置く。塔頂は三角形。

二十号塔　無縫塔。総高１２７糎，塔身高６２糎，大径３１，底径２５糎，請花高２３糎，その下に反花座をつくる。
基礎の高さ４２糎，方形で一面巾５０糎，正面と左右面に格狭間をつくり蓮弁を刻出している。
銘は塔身正面に「白卍」とある。



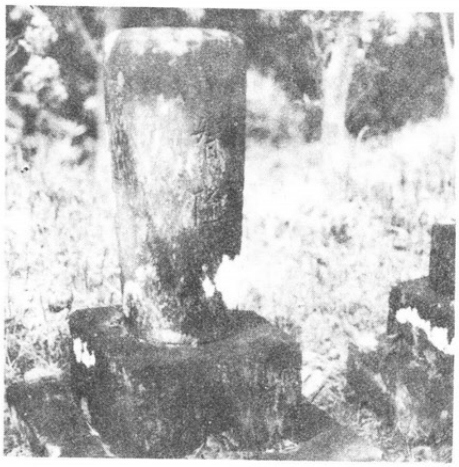
二十一号塔　無縫塔。総高１５１糎。塔身７２糎。請花高２２糎，基礎高５７糎のうち上部２６糎の高さに，六角面の上に反花を刻出している。各面に格狭間をつくる。基礎の下に基壇を置く。



二十二号塔　自然石型墓塔，塔身高８２糎。基礎高１９糎，巾６５糎，下に基壇を置く。銘は塔身正面に「慧海」とある。

二十三号　無縫塔。総高１３１糎。塔身高６２糎，大径３０，底径２４糎。請花高２０糎，基礎高４９糎。銘は塔身正面に「春峰」「享保十五」「当寺十六世」「二月廿日」とある。

二十四号塔　無縫塔。総高１１１糎。塔身高６４糎。請花なし。塔身の下に高さ２８糎，各辺径３５糎の六角の台石を置き基礎は高さ１９糎，巾５４糎（方形）としさらに二段の基壇を置く。銘は塔身正面に「堂山十八世大通音大和尚」，右側に「宝暦三発酉歳」左側に「三月九日示寂」，さらに裏面に「蔵鷺塔」とある。



二十五号塔　無縫塔。総高８９糎。塔身高６６糎。請花なし。基礎高２３糎。銘は正面に「智隆」とある。

二十六号塔

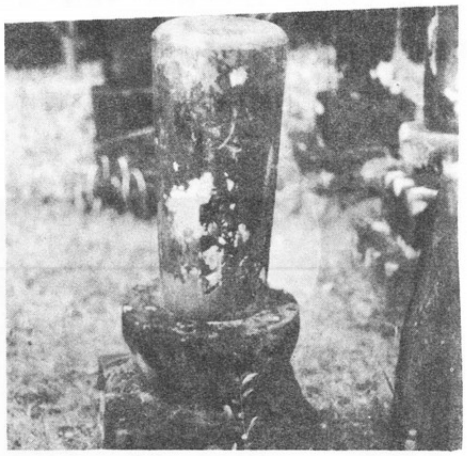
自然石型墓塔，塔身高１１１糎。巾２２糎。基壇三段につくる。無銘

二十七号塔　無縫塔。総高１０３糎。塔身高５９糎，請花高２１糎，上面径３７，底径２７糎基礎高２３糎，下に二段の基壇を置く。銘は塔身正面に,「染月前住職蔵海大和尚禅師」「当山三十世」とある。

二十八号塔　無縫塔。総高１０１糎，塔身高５８糎，大径２１，底径１８糎，請花高３０糎，上面径４０，底径２４糎。基礎高１３糎。銘は塔身に「活眼丹龍首座」とある。

二十九号塔　板碑型墓塔，塔身７２糎。径２４糎塔頂山形，高さ１０糎。塔身正面に「風山道雲禅定門」の銘がある。

三十号塔　角柱墓塔　高さ７４糎，径２１糎，塔身正面に「□□□□□」，右側に「延宝４年辰」左側に「十二月十六日」の銘がある。



三十一号塔　無縫塔。総高１１２糎。塔身高６７糎，大径３０，底径２３糎，請花高２１糎，上面径４０，底径２６糎，基礎高２４糎。銘は塔身正面に「大嶺塔」右側に「堂山三十三世」，左側に「安政四年己午十二月廿二日」とある。塔頂部に突起をつくる。

三十二号塔　宝塔。総高１６１糎，宝珠高１３糎，請花高２５，露盤高７５糎。屋根の厚さ２８糎，巾５８糎，軸部高３９糎，基礎高２５糎，巾５２糎。銘は軸部正面に径２６糎の月輪を彫り，正面に「圭翁全日居士」，右面に「慶長十三戊申正月八日　丹生備前守恒信」とある。

三十三号塔　無縫塔。総高８９糎，塔身高５２糎。請花高１２糎，反花高１２糎。基礎高１５糎。その下に基台を置く。銘は塔身正面に「好牛善越上座」，右側に「正徳二年壬辰」，左に「十二月初六日」とある。請花と反花を一石で臼形の請台としている。

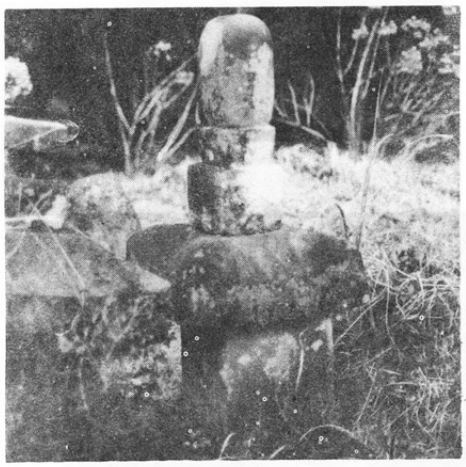
三十四号塔　無縫塔。総高１０２糎，塔身高６３糎。

請花高１２糎，反花高１２糎を，共に一石で臼形につくる。その下に一辺３６糎の四角基礎を置き，さらに二段の基壇がある。塔身正面に「雲山僧龍記宝」の銘を刻している。

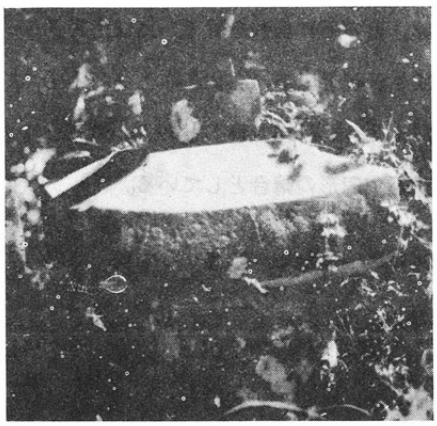
三十五号塔　自然石墓塔。高さ７７糎，巾４１糎。

三十六号塔　自然石墓塔。高さ７８糎巾３５糎。

三十七号塔　宝塔。総高１３３糎，宝珠高３１糎，径１９糎，請花高１１糎，露盤高１７糎，屋根高２４糎，巾４９糎軸部高３７糎，巾３１糎，基礎高１３糎，巾４９糎，軸部正面に「大法師宥印」の銘がある。



三十八号塔　宝塔。相輪を欠く。請花高２６糎，屋根高５１糎，巾５９糎，基礎高５８糎。

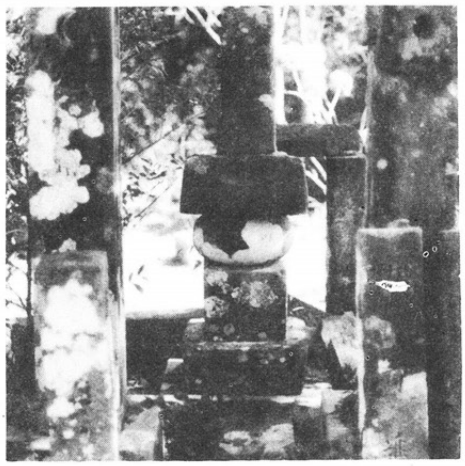


三十九号塔　自然石墓塔。塔身高１２８糎，径４０糎。

四十号塔　無縫塔。総高８９糎，塔身高６７糎，大径２９，底径２５糎，基礎高２２糎，巾４２糎の下に基壇を置く。塔頂は水平に切る。

四十一号塔　角柱石塔。高さ８３糎，巾３１糎基礎高２０糎，巾４２糎。正面に，高さ５５糎中央巾２６糎の龕を彫り，不動明王（高３８，顔巾７５糎）と火焔を陽刻している。裏面に「当山中興，友外自仙和尚禅師」，向って左面に，「元禄八年乙亥十一月吉祥日」「石工一瀬氏重右衛門朝清」の銘がある。当地方で石工の名前を刻している例は珍らしく，歴史資料としても価値の高い石塔である。

四十二号塔　無縫塔。総高７７糎。塔身高５６糎，基礎巾３７，高さ２１糎。請花，反花を欠き，簡略化した塔身だけの石塔。塔頂に突起があり，江戸末期のものと考えられる。



四十三号塔　五輪塔。総高１０７糎。地輪高２４糎，巾２８糎，水輪高１６糎，径３１糎，火輪高１９糎，巾３９糎。風輪高１８糎，巾17.5糎。空輪高３０糎，径１７糎，水輪に「文禄四乙未　圭梅宗乾居士」と刻銘している。

四十四号塔　無縫塔。総高９５糎。塔身高５３糎，大径２５，底径１７糎。基礎高１５，巾４１糎。正徳三年銘がある。

義門寺石塔群

義門寺は，国富町大字本庄４８３４番地の１ならびに４８３３番地の１に所在する古刹である。

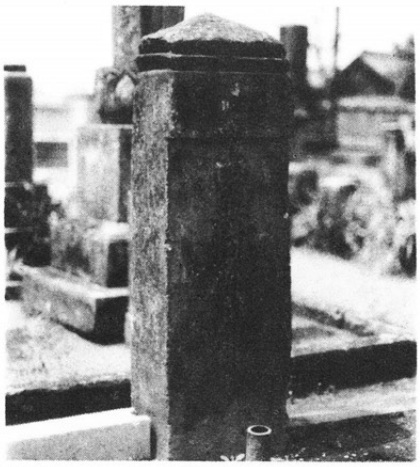
この義門寺の寺域西方に墓地があり多くの中世石塔群が遺存している。今回はこの石塔群のなかでも時代の古いものを対象としたが，さらに他の石塔についても調査をすすめる必要がある。

一号塔　宝筐印塔，基礎高５０糎。基礎に格狭間を彫り，上面に塔身を請けて複弁８葉の蓮弁を陽刻する。塔身は高さ３３糎，幅３３糎の正方角柱。隅飾りは高さ 19.5 糎，下幅 18.5 糎，笠は階段状に６段に作り笠の下は二段に刻む。相輪は九輪目と宝珠を欠失しているが，全体に姿の美しい花崗岩製の宝筐印塔である。　製作年代も造塔様式から南北朝時代と考えられる。県内にも数少ない宝筐印塔の一つであり，石造美術品としての保存価値も高い。

二号塔　板碑。総高１１５糎。頭部を山形につくり，下に二条の横線を引く。山形の高さ２０糎，巾３４糎，額より身部に 2.8 糎彫り込み，身部に「南無阿弥陀仏」と銘を刻む。身部の厚さ２１糎。

三号塔　板碑。二号塔に接して建ち，高さ９４糎，山形の頭部の下に二条の横線を彫る。
山形部分の高さ１３糎，額の高さ１２糎，巾３０糎，額から身部に三糎切り込み，身部に「南無阿弥陀仏」の銘を刻した名号題目板碑である。

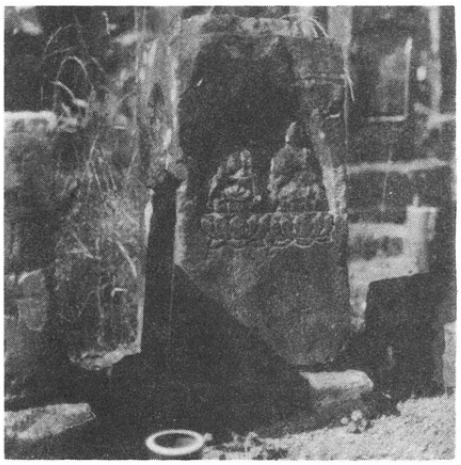
四号塔　五輪塔。総高８８糎。地輪高６糎，巾４８糎，水輪高２９糎，径４０糎。火輪高３０糎，上巾２３糎，下巾５３糎。風空輪を一石でつくり高さ２３糎。火輪の笠のうち三面に「明阿」「応永」「六月六日」とそれぞれ銘を刻り込む。



五号塔　板碑。高さ１１５糎，三角頭頂から額との接点まで１３糎。巾３５糎，額の高さ１６糎。身部に2.5糎切り込む。身部に「南無阿弥陀仏」，右下に「七ケ年」，左下に「応安３年」と銘を刻している。応安３年は西暦１３７０年。６１２年前の南北朝時代の造塔。

六号塔　笠塔婆。高さ１０３糎。台石高９糎，巾８９糎，塔身高７３糎，巾５３，厚さ２５糎。笠石高２１糎，巾８３糎の切妻造で棰を施す。棰巾３糎。塔身の中央に，弥陀三尊像を彫り，右側に「口口十五年庚戌」，三尊像の下に「明仏口」，左下に「施主　敬立」「八月廿七日」とある。口口十五年の庚戌の年は慶長１５年（１６１０）となる。

七号塔　笠塔婆。高さ１３０糎。台石高さ７糎。巾８０糎。碑高９０糎，巾４４糎。厚さ２６糎。笠石高３３糎。仏像を碑面６糎を彫りくぼめて中に陽刻している。塔身に刻んだ仏像の下部に「為常春禅定門施主」右に「干時天正十一年昭陽協洽」，左に「拾月二十四日」と銘を刻する。



八号塔　笠塔婆。高さ６７糎。台石高９糎，巾３９.５糎。塔身高５８糎。巾３１糎。笠石は欠失している。銘は塔身に

「　旨　永禄

逆修　昭阿弥陀仏

口根徳仏房」とある。

高田原地下式横穴発掘調査

東諸県郡国富町大字深年字高田原5751番地

例　　言

1. 本報告は，昭和５６年４月３０日から５月８日まで（６日間）国富町教育委員会が県文化課の協力を得て実施した高田原地下式横穴群の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は，県文化課主事面高哲郎，北郷泰道，菅付和樹が担当した。
3. 本報告の執筆は，面高，北郷，菅付があたり，遺物の実測，トレースは須恵器を県文化課山中悦雄が行った以外は各執筆者が行った。
4. 写真撮影は，面高，菅付が行った。

目　　次

Ⅰ．所　在　地 …… 27

Ⅱ．調査に至る経過 …… 28

Ⅲ．調査の結果 …… 29

1. 第56－1号 …… 29

2. 第56－2号地下式横穴 …… 32

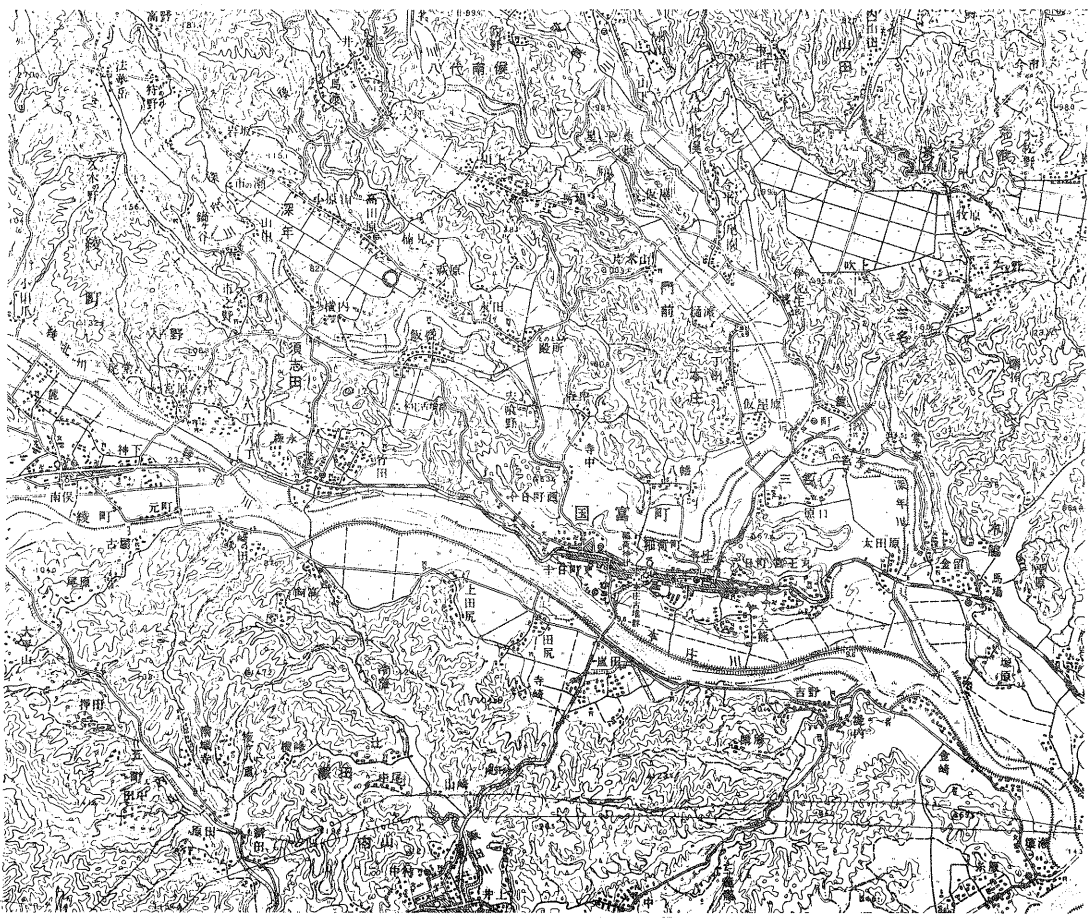
Ⅵ．結　　語 …… 37

I　所在地（第１図）

国富町の北西には，本庄川支流である後川，深年川にはさまり，南東へ緩やかに南東へ傾斜する高田原台地がある。地下式横穴は，台地南東端の標高約８０ｍに位置する。行政上は，東諸県郡国富町大字深年字高田原５７５１番地である。

高田原台地での地下式横穴の調査例は，昭和４３年２月，石川恒太郎氏及び天理大学によって字市ノ瀬で調査された４基があるのみで字高田原においては今回が初めてである。（註１）今回調査された地下式横穴は，２基であるが，古老の話によると，以前，付近には小円墳らしいものも存在しており，また，開田中数ケ所の陥没もしていることから，当地に数多くの地下式横穴が存在すると予想される。高田原地下式横穴と市ノ瀬地下式横穴とは，直線にして約１㎞の距離を隔てており，両者は各々独立して群を形成しているものと考えられる。

註１　石川恒太郎「地下式古墳の研究」１９７３



第１図　遺跡所在地（○印）

Ⅱ　調査に至る経過

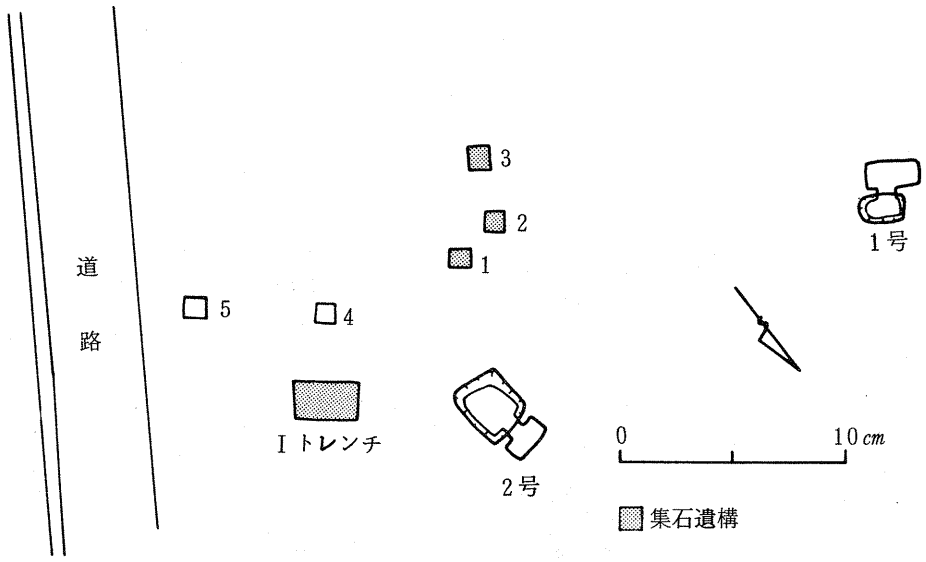
昭和５６年４月１０日，地主　　氏よりゴボウ栽培のためトレンチャーにより深耕作業中２ケ所が陥没したとの連絡が国富町教育委員会にあり，現地調査を行った結果，地下式横穴であることが確認された。陥没部は地下式横穴の天井であり，現状保存が困難であったので発掘調査を行うことになった。

現地調査の際，　氏の畑には土師器，須恵器片が散布しており，また，耕作中には直刀も出土している。　氏の畑の旧地主である　　氏によると今回発見された地下式横穴の東では道路に沿って幅約２m，長さ約７m，高さ１mの塚があり，刀４～５本が出土している。塚の推定地下には河原石が多数あるため，トレンチャーが使用不能であったことよりここに塚に伴う遺構あるいは何らかの遺構の存在が予想された。そこで，調査は地下式横穴の調査の他，塚の推定地下の遺構の確認調査も併せて行うこととした。

発掘調査は，国富町教育委員会が主体者となり，県文化課主事面高哲郎，同北郷泰道，同菅付和樹の３名の担当で昭和５６年４月３０日から５月８日まで（６日間）実施した。

発見地周辺には，地下式横穴が群集すると予想されるので，今回調査した地下式横穴を高田原地下式横穴群第５６－１号，５６－２号として記述する。(第　２　図)

発掘調査期間中，多大な協力をいただいた地主　　氏に深く感謝します。



第２図　遺　構　分　布　図

Ⅲ 調査の結果

1. 第５６－１号

遺 構（第 3 図）

第５６－１号は，主軸を南東方向にもつ，長方形切妻造平入の構造をもつ地下式横穴である。被葬者は一体で，頭位は南東方向である。

竪穴は，南辺１７０cm，南北１３０cmの隅丸五角形をなす。掘り込みは，赤ホヤ層直上で確認され，深さ１０５cmである。竪穴東部には，長軸８０cm，短軸６０cm，深さ３０cmの落ち込みがある。

羨道は，やや東へ偏る両袖式平入りである。幅は，羨門部で７５cm，玄門部で８１cmとわずかに広くなる。天井横断面は，中央が弧状に低くなり，中央で５６cmが計測される。

また，縦断面高さは，玄室に向って高くなり，玄室天井部との境は明瞭でない。

玄室は，南壁（奥壁）２１５cm，北壁２３５cm，東壁１１７cm，西壁１２５cmが計測されるが長軸２３０cm，奥行き１２０cmの長方形プランと見取れる。天井は，切妻造りで，頂部は丸く仕上げられ稜は見られない。高さは中央部で約７５cmである。南壁及び北壁では，天井部と壁との境で深さ５～７cm掘り込まれており庇様に見える。

玄門右側には柱状の浮彫りがあり，また，天井及び周壁は全面朱が塗られている。

副葬品は，須恵器鐙，直刀，鉄鏃である。鐙は完形で，頭部南東２０cmの位置に直立して置かれていた。玄室南東隅では朱の拡がりがみられた。

閉塞は，明瞭な施設は見られなかったが，玄室への土砂の流入状態から板様閉塞でなかったかと考えられる。

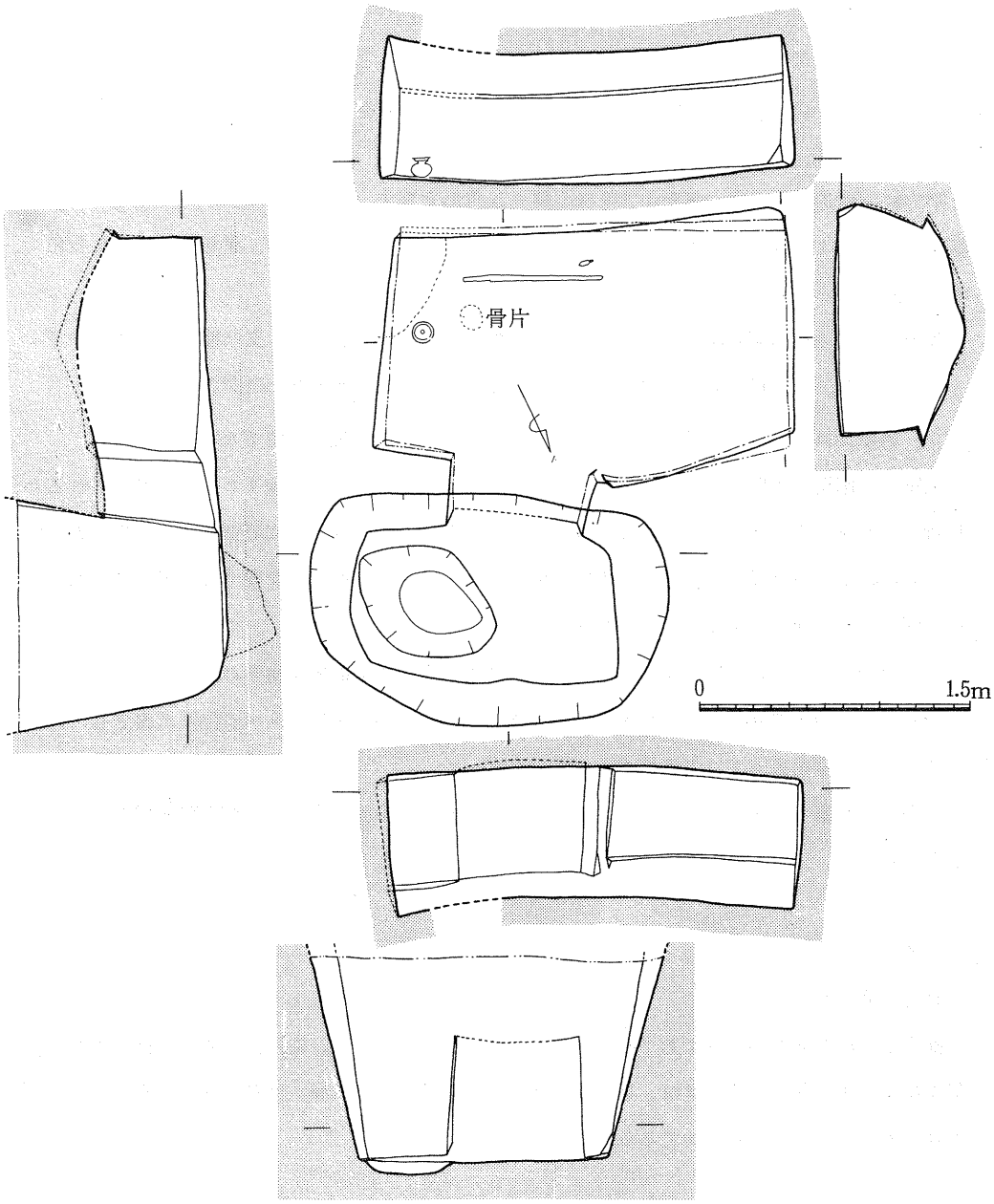
遺 物

直刀（第４図１）

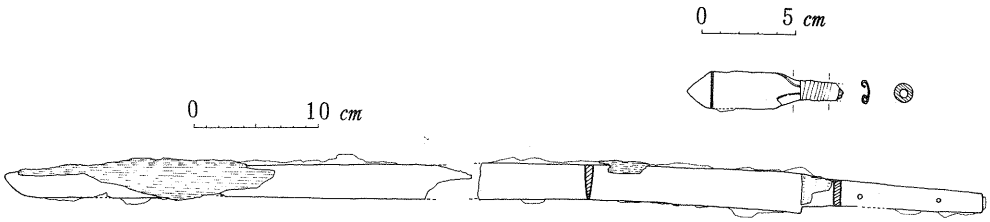
推定全長約７８cmの刀身に若干内反りのある片区の直刀である。造入，平造。茎長１４.２cm，茎先幅 1.5 cm，茎元幅約 2.2 cm，茎先重ね 0.3 cm，茎元重ね 0.6 cm。目釘穴は２ケ所ある。刀身の重ねは中央で約 0.7 cmである。

鉄 鏃（第４図２）

鏃身約 4.5 cm，幅 1.9 cm，厚さ 1.5 mm の鉄鏃である。箆代は両側を折り曲げて造られている。



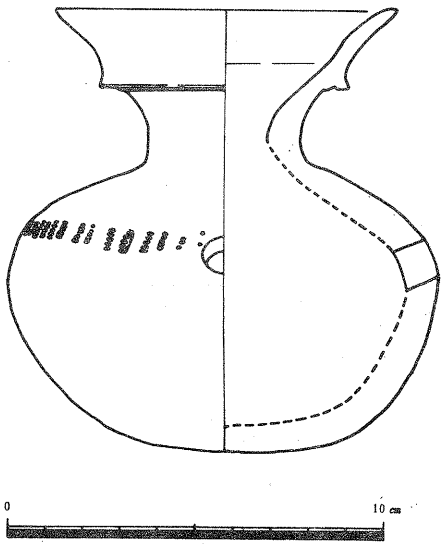
第３図　５６－１号　地下式横穴実測図



第４図　56－１号出土遺物

須恵器𤭯(第　5　図)

口径9.1cm，器高11.6cm。口頸部は外反ぎみに上方へのびて，口縁部に至り端部は失細りとなる。体部は偏球形で，最大径は中位にある。底部は丸底で中位に円孔を穿っている。体部中位よりやや上を６本を単位とする櫛描列点文がめぐっている。体部より下半は微細なハケのあとナデ調整上半はヨコナデである。全面に丹塗の施された痕跡も見られる。(面髙)



第５図　56－１号出土遺物

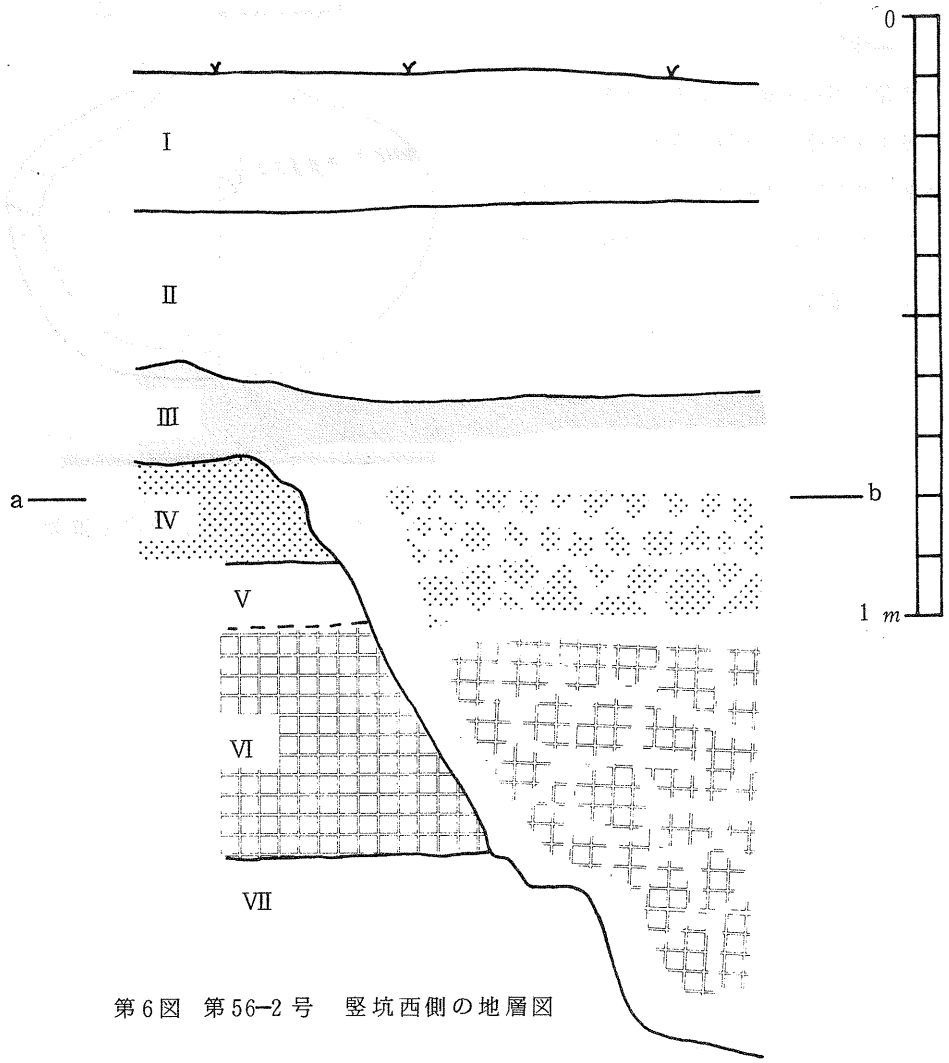
2. 第５６－２号地下式横穴

地層の状態 （第 6 図）

竪坑の西側部分において層序を確認した。

第Ⅰ層は黒色の耕作土で，約２５cmの厚さである。第Ⅱ層も黒色土層であるが，上層に比べて固く締まっている。第Ⅲ層は撹乱層である。上部に風化した赤かっ色のアカホヤ層が広がり，その下部にはアカホヤ塊，さらに粘質かっ色土塊が多く含まれる。これは，竪坑を掘った際の土砂を再び埋め戻したものであろう。第Ⅳ層は黄かっ色のプライマリーな状態のアカホヤ層である。第Ⅴ層は黒かっ色土層，第Ⅵ 層はかっ色土層である。共に粘質を帯びていて締まっている。第Ⅶ層は明るいかっ色土層で，粘質を帯び黄かっ色パミスを多く含む。

なお，深耕農機のトレンチャーは，アカホヤ層下部表土下約８０cmの深さまで達していた。



第６図 第56−2号 竪坑西側の地層図

遺　構（第　7　図）

第５６－２号は，トレンチャーによる深耕中，トレンチャーが玄室天井部を破り発見された。調査に赴いた時，既に玄室内に人が入り遺物の一部は持ち出されていた。天井部は崩壊の恐れがあり危険な状態だったので，掘り開いた後に調査を始めた。

遺構は１号の東方約２０ｍに位置する。主軸はＮ３０°Ｗで南南東に竪坑がある。

竪坑はアカホヤ面で検出された。第　図に示されるように，黒色土層と純粋なアカホヤ層との間に風化したようなアカホヤ層があり，竪坑の掘り込みは純粋なアカホヤ面から始まっていた。この風化したアカホヤ層は羨道の上のアカホヤ層上にも見られた。これは，この２号地下式横穴が造られる際，ある程度の広さにアカホヤ層を削った後に竪坑部を掘った可能性を示すものと考えられる。しかし，現在は畑地にあるため，アカホヤの削り取られた範囲を確認することは出来なかった。竪坑の平面プランは南西隅が中央に寄った不整方形であり，その主軸に対し玄室はやや北西方向に片寄っている。玄室の規模に比べると竪坑部がかなり大きいのが特徴である。

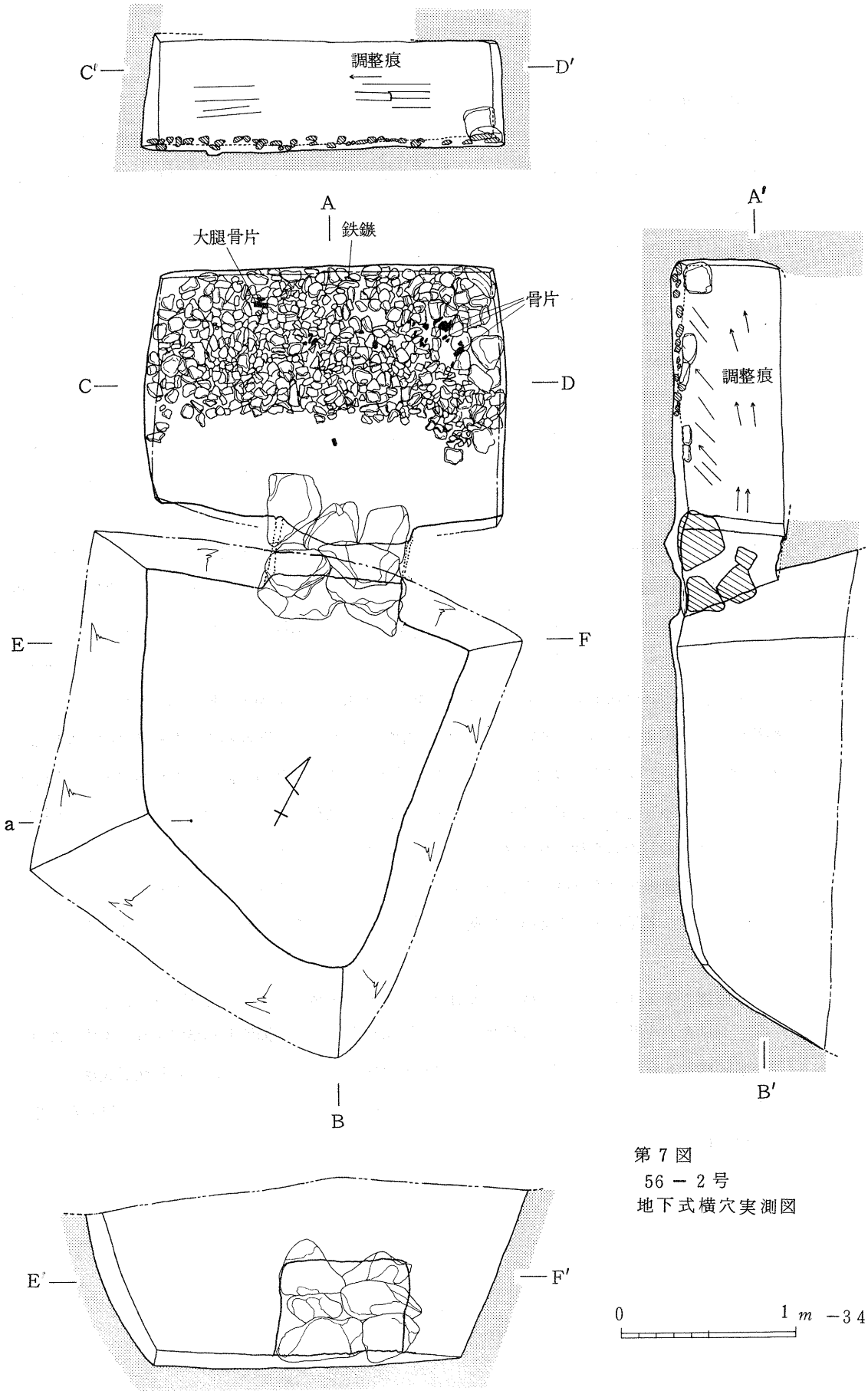
羨門は竪坑の北壁中央に設けられ，約４０cm前後の河原石９個で閉塞されていた。羨門の幅７９cm，奥行きは床面で５３～４３cm，天井部で２５～３４cm，高さ約５５～６５cm，玄門幅は７９cmであった。竪坑と玄室の床面はほぼ同レベルであるが，羨門部前と玄門部前でやや掘りくぼめてあった。

玄室は，アカホヤ層下部を天井に，床面は混パミス明かっ色土層まで掘り込まれていた。玄室の規模は，奥壁幅１９２cm，右壁幅１４１cm，左壁幅１３０cm，玄門部側の右壁幅５３cm，左壁幅６７cmを測り，やや右寄りの両袖平入り長方形プランである。壁面は幅4.7cm前後の刃先「凵」形の工具で右から左方向へ，或いは右上から左下方向への調整痕が残る。奥壁から約９０cmの幅で，５～１０cm大の河原石が敷かれた礫床があり，人骨１体分と思われる骨片が残っていた。また，頭位にあたる右壁際には２０cm大の河原石が立てかけてあった。天井部の高さは崩壊していたためにわからないが，奥壁中央で５９cm，右壁近くに残存している部分は約５５cmで平らである。

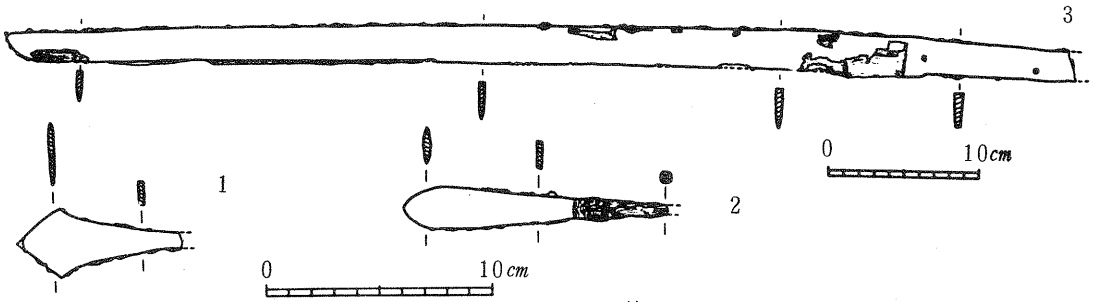
（註）

(1) 県報告第２４集では，小林市水流迫の下の平地下式横穴の類例があげられている。

(2) 扁平な石を壁に立てかけた類例として，国富町深年の市ノ瀬地下式横穴１号，本庄の北神原地下式横穴５号．６号，綾町入野の四反田地下式横穴，えびの市上江の小木原地下式横穴１号等がある。えびの市のものは板石であるが，他の４例は本地下式同様大きめの平らな河原石を用い円礫が敷きつめてある。



第７図
56 － 2 号
地下式横穴実測図



第８図　56−2号地下式横穴出土遺物

遺　物（第　8　図）

第８図１は，変形圭頭斧箭式の鉄鏃で奥壁際に残存していたものである。鋒部をわずかに欠き，現存長７０cm，鏃身最大幅３０cm，厚さ０２cmを測る。

第８図２は，広根両丸造柳葉式の鉄鏃である。現存長１１７cm，鏃身最大幅1.8cm，厚さ０３５cm。矢柄が遺存しているが，状態はよくない。矢柄までの鏃身長は７５cmである。

次述の直刀と共に外へ持ち出されていたため，出土状態は不明であるが，奥壁近くに置かれていたという。

第８図３は，現存長７１８cmの直刀である。平造りで片関をなし，わずかな内反りが見られる。鋒を少し欠くが，刀身長６１２cm，茎部は欠損しており現長１０６cmである。刀身中央部での身幅２５cm，背幅０４cmである。（菅付）

（註）

(3)　地下式横穴からの出土例はまれであり，えびの市島之内の平松第４６－２号地下式横穴（県報告第１６集），高原町後川内の日守第５５－１号地下式横穴（同第２３集）等に見られる。

集石遺構（第　9　図）

いわゆる集石遺構の性格の把握は，古墳があったとする地元民の話しの当否確認の意味からも面的な調査が必要とされたが，作付けの関係及び時間的制約の問題から試掘坑を設定し範囲をとらえることしか出来なかった。試掘坑は６箇所設定し，北側の試掘坑はⅠトレンチとして一応の面的確認を試みてみた。

結果は，Ⅰトレンチ，１～３試掘坑において拳大から人頭大までの河原石の集石が認められた。各試掘坑からは土師器片の出土があったが，器形等全体を復原出来るものはなかった。河原石の検出された状態は，葺石とみるにはプライマリーな位置を保つものではなく，多くは撹乱されていた。

しかし，河原石除去後のⅠトレンチでみられた地形の起状の状態は墳端部を示すものと考えられ又４・５試掘坑で予想通り河原石の出土が確認されなかったことも合わせて，径１５m程度の円墳の存在を認めてよいと思う。（北郷）

第9図　集石遺構実側図

Ⅳ　結　　語

高田原地下式横穴第５６－１号の玄室は，平面形が長方形プランで長辺に庇様構造をもち，天井がアーチ形に近い切妻造りとなっていて，羨道は平入りである。同様な構造をもつ地下式横穴の発見例は，宮崎平野南部では，六野原桃木畑Ａ号，（註１），同吹上５０－１号（註２）などの他，戦前，六野原古墳群調査（註３）の際も発見されている。このタイプは，福尾氏分類のⅡ－Ａ類に属する(註４)。同氏は，Ⅱ－Ａ類の桃木畑Ａ号を６世紀初頭に位置づけている。高田原地下式横穴第５６－１号は，構造及び副葬品から５世紀末ないし６世紀初頭の所産と考えられる。

５６－１号の閉塞施設は確認されなかったが，玄室内への流入土の様子から判断して板様閉塞ではないかと考える。

高田原地下式横穴第５６－２号は（註５），礫床をもつ地下式横穴である。礫床をもつタイプの発見例は，宮崎平野南部でなく，日向内陸部ではえびの市小木１号（註６）があるのみである。宮崎平野部では，長方形平入り（Ⅰ類）及び方形平入り（Ⅱ－Ｂ類）の両者に礫床が見られ，福尾氏は，前者を５世紀代後半，後者を６世紀後半を考えている。（註７）

第５６－２号は，構造がⅡ－Ｂ類に類似するが，天井が箱形に近い形状が予想され，また，出土刀が５世紀代と考えられていることから（註８），６世紀前半の所産と考えたい。

第５６－１号の主軸は南東方向，第５６－２号は北西方向であり，両地下式の主軸が約９０度の差がみられるが，主軸の方位については近年群構造の解明より問題視とされてきている。

主軸方向の差は，群構造の視点から問題提起しているといえよう。また，第56－２号の東に，坂元氏の話を立証するが如く，径１５m程度の円墳の存在を予想させる河原石の集石が確認されたが，詳細については明らかにしていない。今後の調査を期待したい。(面高)

註１　日高正晴　「宮崎県桃木畑地下式Ａ号墳」　古代学研究６４号　１９７２

註２　日高正晴，岩永哲夫　「吹上地下式古墳発掘調査」　宮崎県文化財調査報告第２０集　１９７８

註３　瀬ノ口伝九郎，石川恒太郎「六野原古墳調査報告」史跡名勝天然記念物調査報告第１３輯　１９４４

註４　福尾正彦　「日向中央部における地下式横穴とその社会」　古文化談　第７集　１９８０

註５　同様な例は，綾町地下式横穴，飯盛地下式横穴第５３－１号等で報告されている。

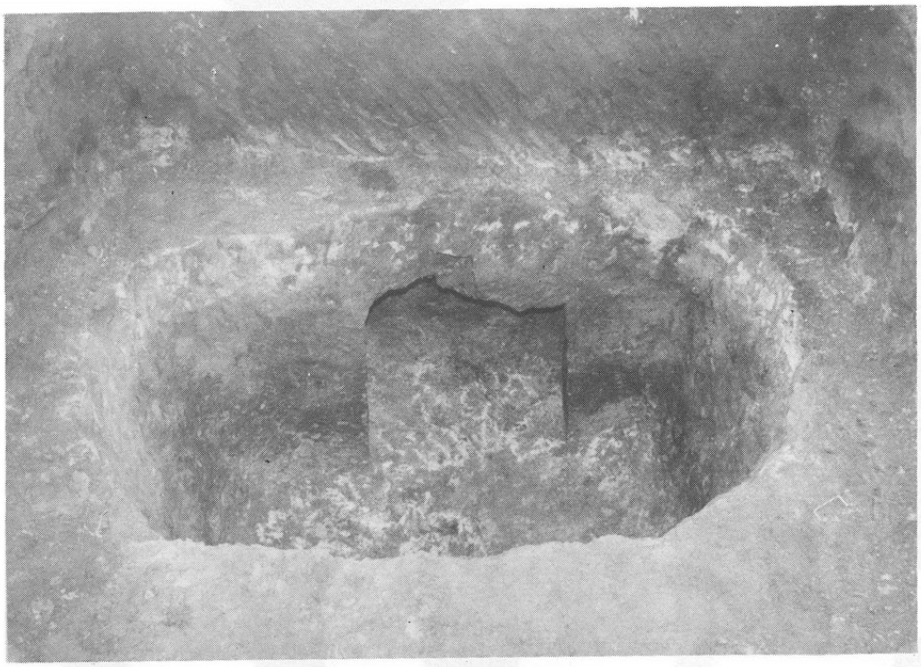
註６　日高正晴　「小木原古撹」　九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)　１９７２

註７　註４に同じ

註８　石井昌国　「出土刀」　新版考古学講座７　有史文化（下）

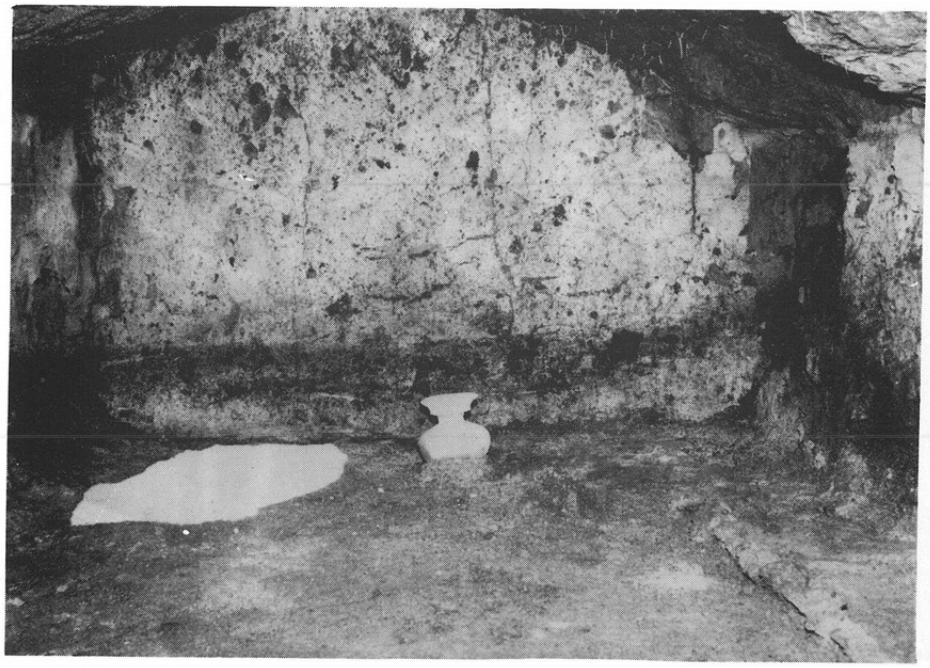
第５６－１号出土遺物（１．３．４），２号出土遺物（２．５．６），
周辺出土遺物（７）

高田原地下式横穴第５６－１号



(1)　竪坑及び羨門

(2)　玄門右浮彫

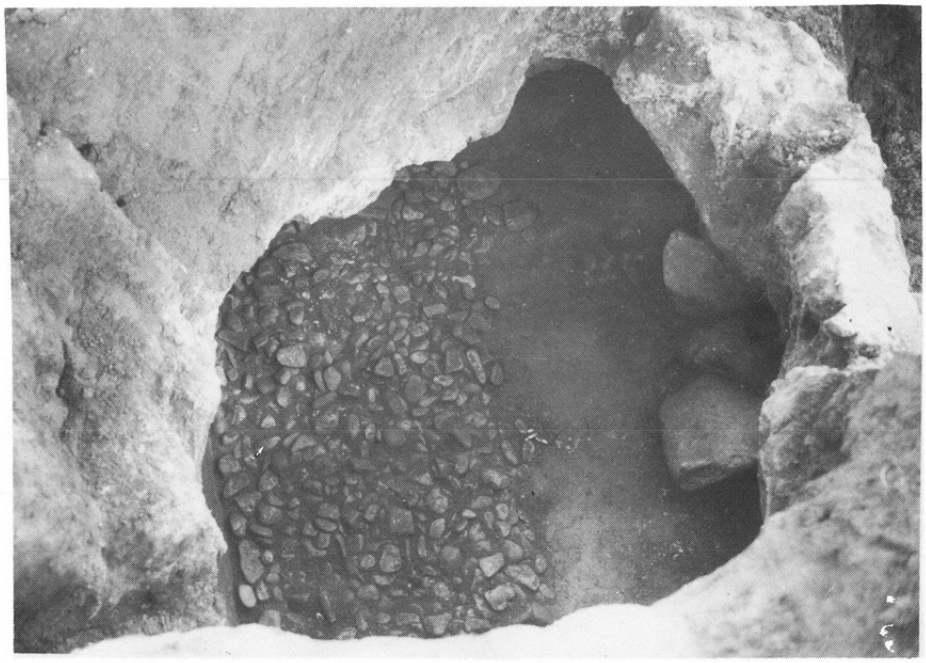


(1)　玄室内遺物出土状況（頭位方向）

(2)　玄室状況（足位方向）

(1)　羨門部閉塞状況

(2)　竪坑及び羨門（閉塞石除去後）



(1)　玄室内状況

(2)　鉄鏃出土状況

六野原地下式横穴30号・31号調査報告

——東諸県郡国富町大字北俣字源六原——

長　津　宗　重

茂　山　　護

目　　次

Ⅰ　はじめに …… 48
Ⅱ　遺跡の現状 …… 49
Ⅲ　遺　　構 …… 53
　1.　六野原地下式横穴３０号 …… 53
　2.　六野原地下式横穴３１号 …… 56
Ⅳ　遺　　物 …… 58
　1.　須恵器と土師器 …… 58
　2.　鉄製品 …… 61
　3.　小　結 …… 62
Ⅴ　結　　語 …… 63

図・図版

第１図　六野原と周辺地下式横穴群の分布
第２図　東諸県郡国富町源六原表採土器拓影
第３図　六野原地下式横穴－第Ⅱ群－の配置図
第４図　源六原遺構位置図
第５図　六野原地下式横穴３０号実測図
第６図　六野原地下式横穴３１号実測図
第７図　六野原地下式横穴３０号出土須恵器実測図
第８図　六野原地下式横穴３０号出土須恵器実測図
第９図　六野原地下式横穴３０号出土鉄器実測図
図版１.　六野原地下式横穴３０号　玄室内部
図版２.　六野原地下式横穴３０号　出土遺物－須恵器・刀子・鉄鏃

第1図　六野原と周辺地下式横穴群の分布

1.本庄（宗仙寺・祝子園）　2.飯盛　3.市の瀬　4.大坪　5.六野原

6.元知原　7.下三財（前原・月中）

Ⅰ はじめに

地下式横穴の調査件数が３００を越すに至った今日、これらが群集墓を構成することは周知のところとなっている。しかしながら、地域毎、遺跡ごとに群構成が確実に把握された調査例はきわめて少ないのが現状である。地下式横穴の調査は、その多くが単独発見による緊急調査に終始し、それらの集積された結果、一つの墓群として位置づけられるのがこれまでの実情であった。従って個々の遺構記録はありながら位置関係など群集墓としての相互関係を追認できない現状から脱脚し、個々の調査の累積がそのまゝ常に地域の群構成の把握につながるように努めることが、緊急調査において課せられた責務といえる。

国富町は、本庄台地の宗仙寺地下式横穴群をはじめ飯盛、市の瀬、大坪、六野原と県下でも有数の地下式横穴の群集地だけに、各遺跡ごとの調査累積が今後の国富町内の遺構調査にも強く要請されてきているわけである。

今回の遺構発見の直接の動機は、５６年8月２１日に、町営の耕土改良事業に伴う大型トラクターの畑地深耕作業中の墓室天井の陥没によるものであった。幸い町営事業であった事と、発見地が、かって多くの地下式横穴の存在が確認された六野原台地の一隅であった事も手伝って、遺構の湮滅を防ぐことができ、六野原地下式横穴群に資料の累積を果せたのは幸いであった。

通報を受けた町教育委員会では、直に調査体制を整え緊急調査することになった。調査は、町教委の依頼を受けて茂山護、長津宗重の両名で担当実施することになったが、諸般の事情から、５６年８月３１日と9月１日の２日間という緊縮された日程に集約せざるを得なかった。しかも、当初の予定では1基だけであったのが、現地でもう一カ所の陥没地点を確認した事もあり、２日間で２基を調査する結果となったことは、調査の万全を期する上からは遺憾であった。

調査にあたっては、町教委文化財担当鈴木係長はじめ、町教委社会教育課関係者、地主　　氏、

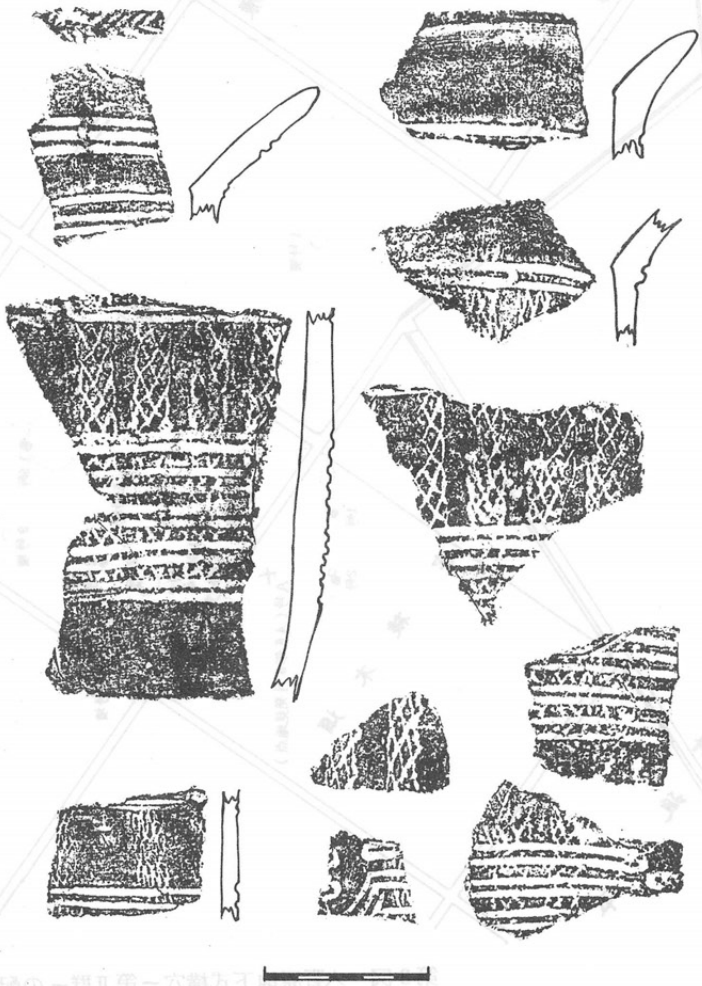
氏には、多大のご協力を得た。記して感謝の意を表わしたい。

Ⅱ 遺 跡 の 現 状

遺構の発見された国富町大字北俣字源六原（３７０３－３４、３７０３－３１）は、いわゆる六野原原台地の一偶であり、台地の西方縁辺に位置する。その位置は、台地の中央を横断する三名、山田を結ぶ県道を吹上に登り、碁盤目に通る農道のうち、吹上から北へ３番目の東西に走る農道を県道から左折西進した突き当り地点になる。

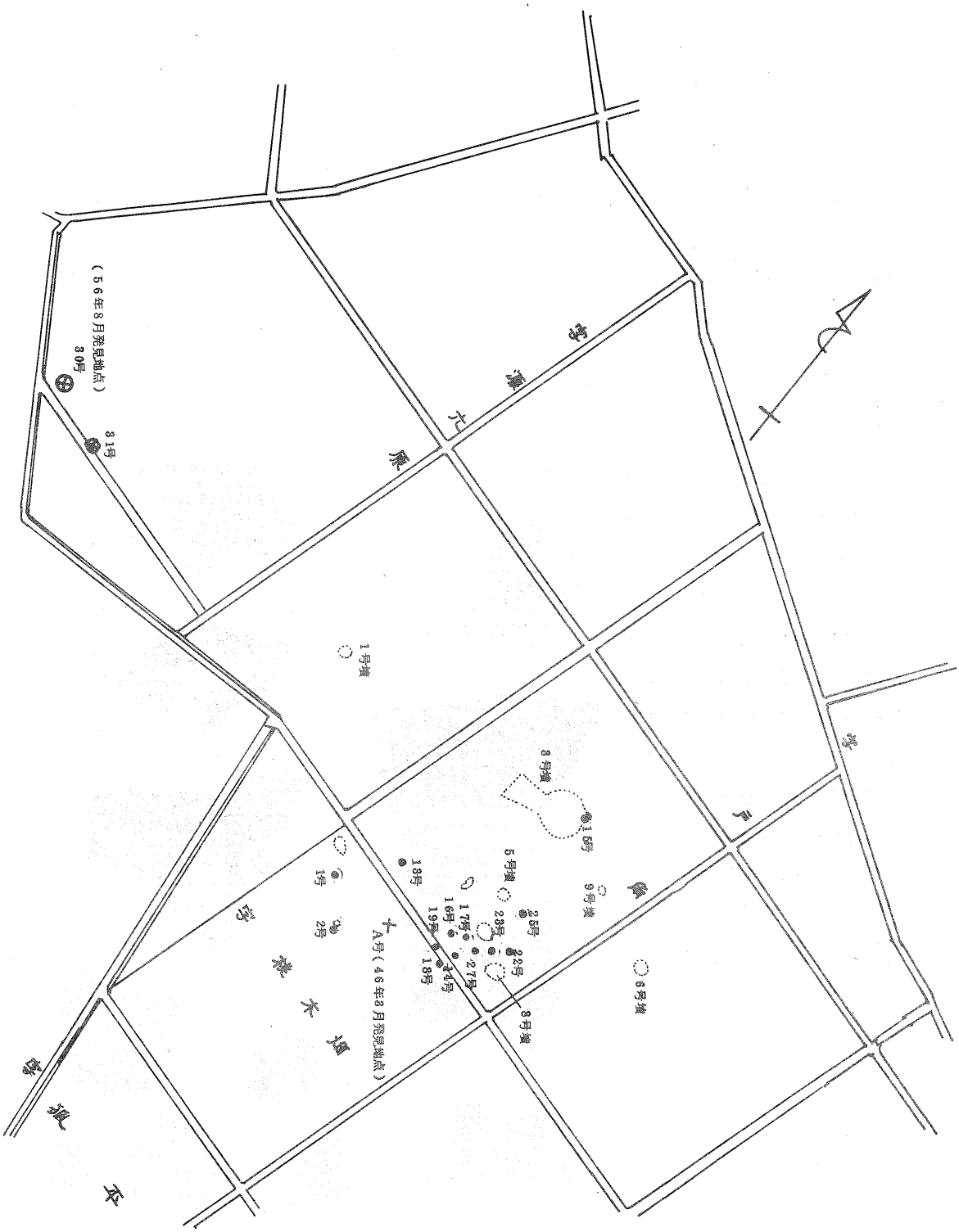
六野原台地は、北に隣接する西都市山田・都於郡の丘陵地を背にして、南に開けた標高　100m、東西４㎞、南北１㎞、面積４００haを容する高延な台地である。第三紀層を基盤として厚いシラス層と日向ローム層に覆われたこの台地が、早くから人々の生活の舞台となってきたことは、台地上の諸処から多くの遺物が採集されていることからも明らかである。(註１) 今回の調査に際しても、遺構発見地の周辺畑地から縄文前期の寒ノ神式土器（第２図）が採集されており、埋蔵文化財の包蔵地として一層の確認調査の要請される台地といえる。

ところで、「六野原台地」といえば、昭和１７・８年の軍用飛行場建設に伴って実施された「六野原古墳群」(註２)の調査が想起される。１０基の高塚古墳の調査改葬に伴って行なわれた２７基の地下式横穴の調査は、地下式横穴を群として把握した最初の調査であり、本県の地下式横穴研究史上画期をなす貴重な調査であった。今日、出土資料の再検討と、その再整理による基礎的な資料集成が求められてきているのである。



第２図　東諸県郡国富町源六原表採土器拓影

六野原台地の周辺の北俣川、三名川、深年川で縦断された台



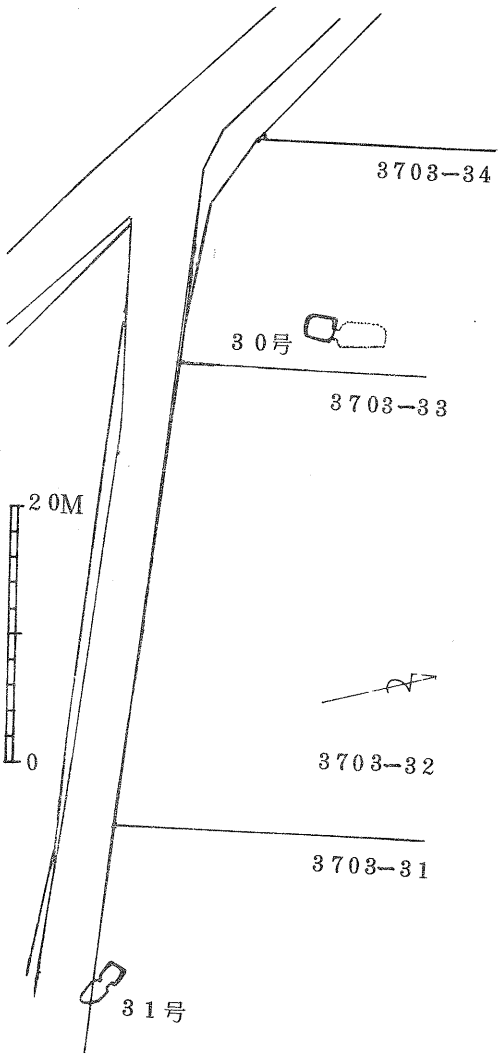
第3図　六野原地下式横穴ー第Ⅱ群ーの配置図
（「六野原古墳調査報告」による推定位置）

地上には、六野原北西方の元知原をはじめ、八代南俣の大坪、深年台地の市の瀬、須志田の飯盛、そして、南に、本庄台地、北に下三財の前原、月中と、濃厚な地下式横穴群の分布地帯となっている。西都原と本庄を結ぶこの地域の歴史的地理的環境が重視されるわけである。（第１図）

六野原地下式横穴群の２７基は、吹上以西の台地上に分布していたもので、二つの群集に分けることができる。一つは、字六野原と字吹上に分布した１４基で、円墳１基を加え、甲冑を出土した８号墓と１０号墓を中核とする群（以下第Ⅰ群と称する）と、字桃木畑と字狐平、字戸角に分布していた１３基の群（以下第Ⅱ群と呼称する）とである。第Ⅱ群には、前方後円墳１基と円墳８基の計９基の盛土墳が存在していた。第Ⅱ群の中心は、副葬品の上からは狐平の１号墓に代表されるが、構造上天井に屋根の棰を線刻表現していた２号墓は注目される遺構の一つに数えられる。

今回発見された２基は、この第Ⅱ群の西方に位置している。「六野原古墳群調査報告書」の分布図を拡大し、現在の耕地整理された地形図に重ねた推定配置図（第３図）によれば、１号墓とは、東西におよそ４３０ｍ離れた地点に位置している。現在、字名は源六原であるが、元は狐平に属していたらしく、１号、２号墓の所在地も狐平から桃木畑に包括されるなど、旧字名と現状には若干のくい違いがみられる。いずれにしろ、第Ⅱ群でもっとも集中するのは桃木畑である。今回の２基も一応第Ⅱ群に位置づけておくが、桃木畑が台地の中央に近く、源六原との間には谷が入り込んでおりしかも台地の縁辺という現況からすると、将来源六原を中心に一群の構成されることも十分に考えられる。

六野原では、２７基のほかに、４６年に桃木畑に１基、（註３）５０年に吹上に１基が発見されており通算２９基が調査されていることになる。（註４）従って、今回の２基を加えると３１基を数えることになる。今後更に発見される可能性は高く、



第４図　遺構位置図

地域毎に群構成の細区分も予想される。それだけに、昭和１７．８年の調査以来、六野原地下式横穴群として位置づけられてきたことを配慮し、この台地上に発見される遺構は、全体数を把握する上からも一連番号で呼称しておく方が至当である。従って、今回発見の源六原の２基は、西側遺構から六野原地下式横穴３０号、同３１号として報告することにした次第である。

（註１）　田中熊雄「宮崎県考古資料発見地名表」
（『宮崎県文化財報査報告書』第2輯）１９５７

（註２）　瀬之口伝九郎「六野原古墳調査報告」
（史蹟名勝天然記念物調査報告　第１３輯）１９４４

（註３）　日高正晴「宮崎県桃木畑地下式Ａ号墳」
（「古代学研究」６４号）　抜刷

（註４）　岩永哲夫「吹上地下式古墳発掘調査」
（「国富町文化財調査資料」第1集　１９８０

Ⅲ　遺　　構

1　六野原地下式横穴３０号

構造　竪坑を南に、玄室を北側にして掘さく構築した全長640㎝の長方形妻入形の平面構成をとる遺構であった。竪抗と玄室の中心軸は、羨道を境にして屈折しており方位の偏りかみられた。即ち、竪坑の、Ｎ３１°Ｅの中心軸に対し、玄室の長軸中心線はＮ１９°Ｅにあり竪坑より北へ１５°偏って掘さくされていた。

現地は、耕土改良事業による大型トラクターの深耕削平が著しく、耕土面から５０～６０㎝下層の黄橙色火山性砂質土（赤ホヤ）層面まで撹乱され、随所に赤ホヤの土塊が耕土上に掘り起された状態にあった。従って、耕土面から赤ホヤ層までの層序については明らかにできなかったが、赤ホヤ以下の土層については第５図実測図断面に示した通りである。

地下式横穴は、多くの場合赤ホヤ上層の黒土層中より掘り下げ、赤ホヤ層乃至は下層の黒褐色粘質土層を天井として下層の粘土層に墓室を構築している。若干地層の違いはあるが本遺構も同様の構造であった。基盤整備等で遺構が発見されるのは、いずれも、赤ホヤ層上面まで削平された場合である。土質にもよるが、一般に遺構上部の土層厚が６０㎝以下にならない限り容易に陥没はしないものである。

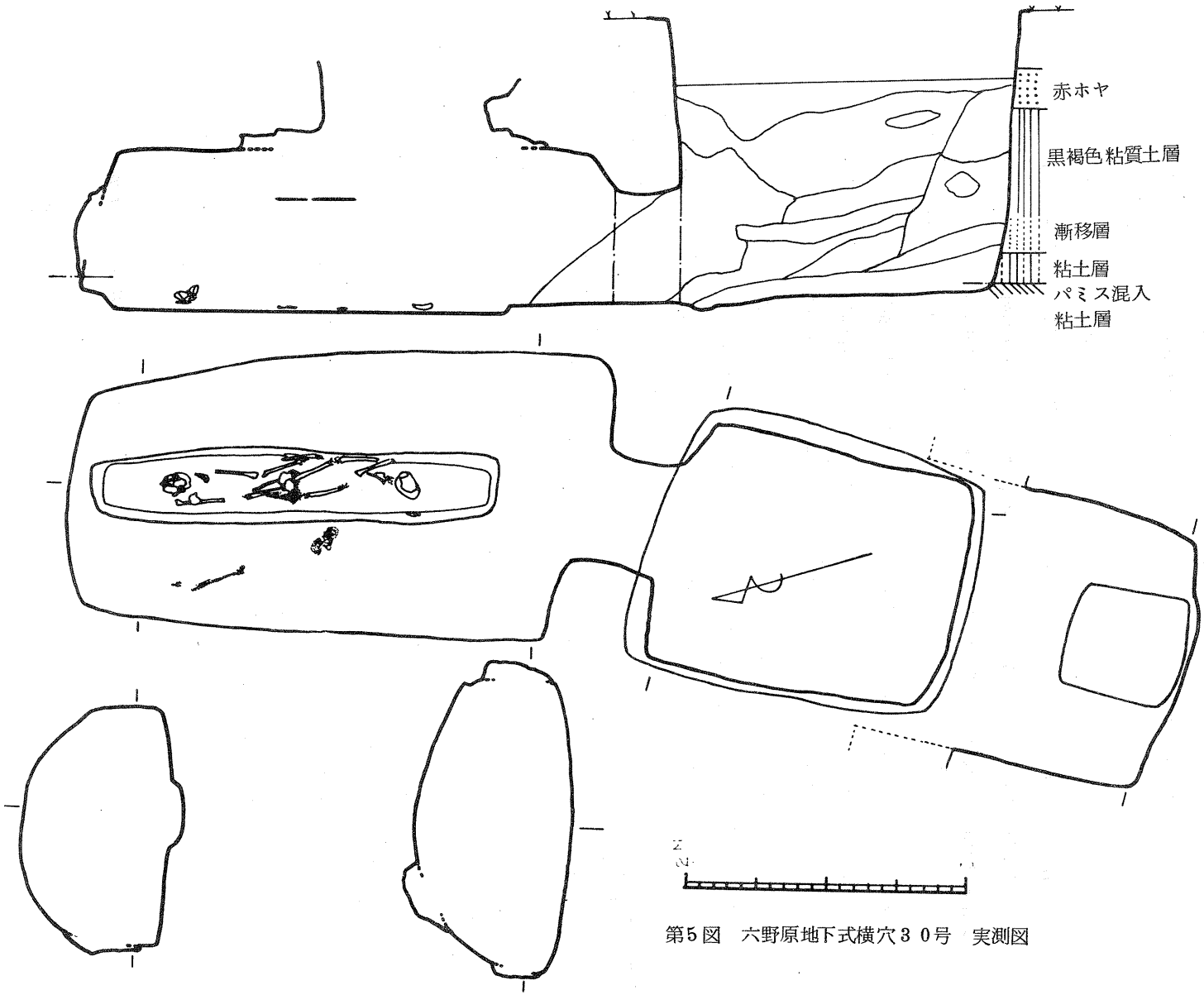
本遺構の場合も赤ホヤ層に竪坑の掘り込みを明瞭に確認することができた。掘り込みでは、長さ２３０㎝、幅１９５㎝のやゝ変形した隅丸長方形をとり、ほぼ垂直に１６０㎝ほど掘り下げ、パミス混入の粘土層を床面として横穴を掘さくしていた。現在の耕地面からするとおよそ２ｍ下に　坑底は位置していることになる。竪坑床面の広さは、長さ２１０㎝、幅１７０㎝、3.5㎡であった。

羨道は、竪坑北側基底壁面のほぼ中央に、坑底を底辺として、高８０㎝、幅底辺で８０㎝、天井部で７０㎝の梯形状に開口する。玄室までの長さは５０㎝、膝つきの姿勢でようやくくぐり抜けられる程度の羨道であった。

玄室は、羨道から左右にほぼ均等に掘り広げた両袖型につくる。玄門部の幅２１０㎝、東側壁の長さ３７０㎝、西側壁面の長さ３３０㎝、奥壁幅１５０㎝と、奥壁に向って若土狭ばまる隅丸長方形の平面形をとっている。天井は、中心部分が陥没剥落しているので断定できないが、奥壁に近い部分の状態や、両側に棚状切込もないことからドーム形に造られていたと推定される。天井高は１０５～１１５㎝を測る。

玄室床面の中央には、奥壁から２０㎝手前から羨道の方へ向って全長２９０㎝、両端がやゝ狭くなるが幅４５～５０㎝、深さ５㎝の長方形の屍床を設けていた。

羨門の閉塞については特別の遺構は検出できなかった。しかし、玄室内部への流土量は少なく何



第5図　六野原地下式横穴３０号　実測図

等かの閉寒施設の存在したことが推定される。このことは、竪坑の埋土の推積状況からも、羨門付近の黒土が軟かく周辺に比べ固化状態になかった事からも窺える。羨門に特別の閉寒施設の遺構が認められないのは六野原地下式横穴群に共通する傾向といえる。

埋葬遺骸　玄室内部に遺存した人骨は２体分であった。（第５図）２体の人骨は、それぞれ頭位を異にし、南頭位の１号人骨と、奥壁側に北頭位をとる２号人骨とであった。両者は、いずれも屍床の両端から６０cmの位置に頭蓋骨が遺存しており、その間に四肢骨が重なりあった状態にあった。２号人骨が頭蓋骨四肢骨とかなり保存されており、骨格の確認ができたのに対し、１号人骨の方は全体的に遺存状態が悪く頭蓋骨も、前頭部から後頭部にかけての輪かくの一部をとどめているにすぎなかった。四肢骨は床面に密着した痕跡状態であった。このような人骨の遺存状態は、１号人骨と２号人骨の埋葬に時間差のあることを示すもので１号人骨埋葬後すでに自骨化した時期に２号人骨の追葬があったのではないかと考えられる。ことに屍床西側の墓室床面に密着した四肢骨の一部と考えられる骨片は、２号人骨埋葬時に屍床内から排除された１号人骨の一部と考えられるものでであった。竪坑埋土の断層図も再度の推積状態を示していた。（第５図）

同一墓室内に２体の遺骸が頭位を異にして埋葬されていた例は、大萩７号や、本庄２８号例があるが、本例のように、埋葬遺骸が交互にしかも重なりあった状況に置かれていた例は、大萩３号の１例（註１）が知られている。

遺物の出土状況　３０号の副葬品は刀子と鉄鏃のみであった。刀子は、屍床の北端から５０～６０cm、２号人骨頭骨の下に切先を北にして出土している。鉄鏃は、屍床の南端から６０cm、１号人骨頭骨の西側、屍床側縁に先端を北にして副葬されていたものである。いずれも頭蓋骨に沿った出土状況からすれば、刀子は２号人骨の、鉄鏃は１号人骨に副葬されたもも考えられるが、断定はできない。

玄室全長３ｍを越す長方形妻入り型の地下式横穴としては、副葬品の少ない遺構であった。しかし、本遺構にとって注目されるのは竪坑上部で検出された須恵器と土師器である。これらの土器は、いずれも破砕された状態で出土しており、おそらく埋葬儀礼に伴う祭器として使用され埋葬後に破砕遺棄されたものと考えられる。ただ、耕土の撹乱が著しく、竪坑周辺の土層観察が十分にできなかった事もあり、竪抗上部における盛土や、墓域等の確認ができなかっただけに、土器類の破棄散乱状況の詳細が記録できなかったのが残念である。

（註１）　「大萩遺跡」(1)（「頼戸ノ口地区特殊農地保全整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」１９７４

大萩３号では男女であり、男性の埋葬後に女性が埋葬されたと推定されている。

六野原３０号２号人骨の性別については後日人類学の判定をまちたい。

2　六野原地下式横穴３１号（第６図）

構造　当遺構は、３０号とは逆に竪坑を北に玄室を南にして構築されていた。竪坑と玄室の中心線は、羨道を境に１号墓同様の偏りがみられた。竪坑の中心軸はN３５°Wに、玄室の方はN２０°Wに中心軸を置く構築となっていた。

形態上は竪坑－羨道－玄室が縦列する全長３７０cmの長方形妻入型に属する遺構であるが玄室の形はかなり変形し、いびつである。

遺構の床面での計側値は、竪坑の長さ１２５cm、幅１００cm、羨道は幅６５cm、長さ５０cm、推定高６０～７０cm、玄室は、奥行１９６cm、幅は手前で１３５cm、中央部で１１５cmを測る。中央付近から玄室東側壁が急激に狭まり幅３０cmの奥壁に合流する。このため、玄室全体は、西壁側の突出した不定形の墓室を形造ることになった。全体の形態からは、元知原の片袖P字形の遺構（註１）に連なる要因を示しているともうけとれる。壁面に残る掘削痕から推定すると、幅１４cm前後のU字形鋤先装着の掘り具が使用されたものと考えられる。掘削痕は、東壁では左から右へ、西壁では右から左方向へ斜に掘り具の使用されたことを示している。また奥壁近くでは突き掘りした状況が観察され、柄と刃先が垂直に取りつけられた鋤具であったものと推定される。

玄室天井はドーム状に造られ、床面からの高さは中央部分で６８～６３cmで、両側、奥壁に向って低くなっている。従って、玄室内は膝つきの這ばい状態でどうにか身動きのとれる程度の墓室であった。

西壁に沿って設けられた屍床は、幅３０～４０cm、深さ５cmの無造作なもので、床面には約３cmほどの厚さに、きめ細かい軟かい敷土が観察された。

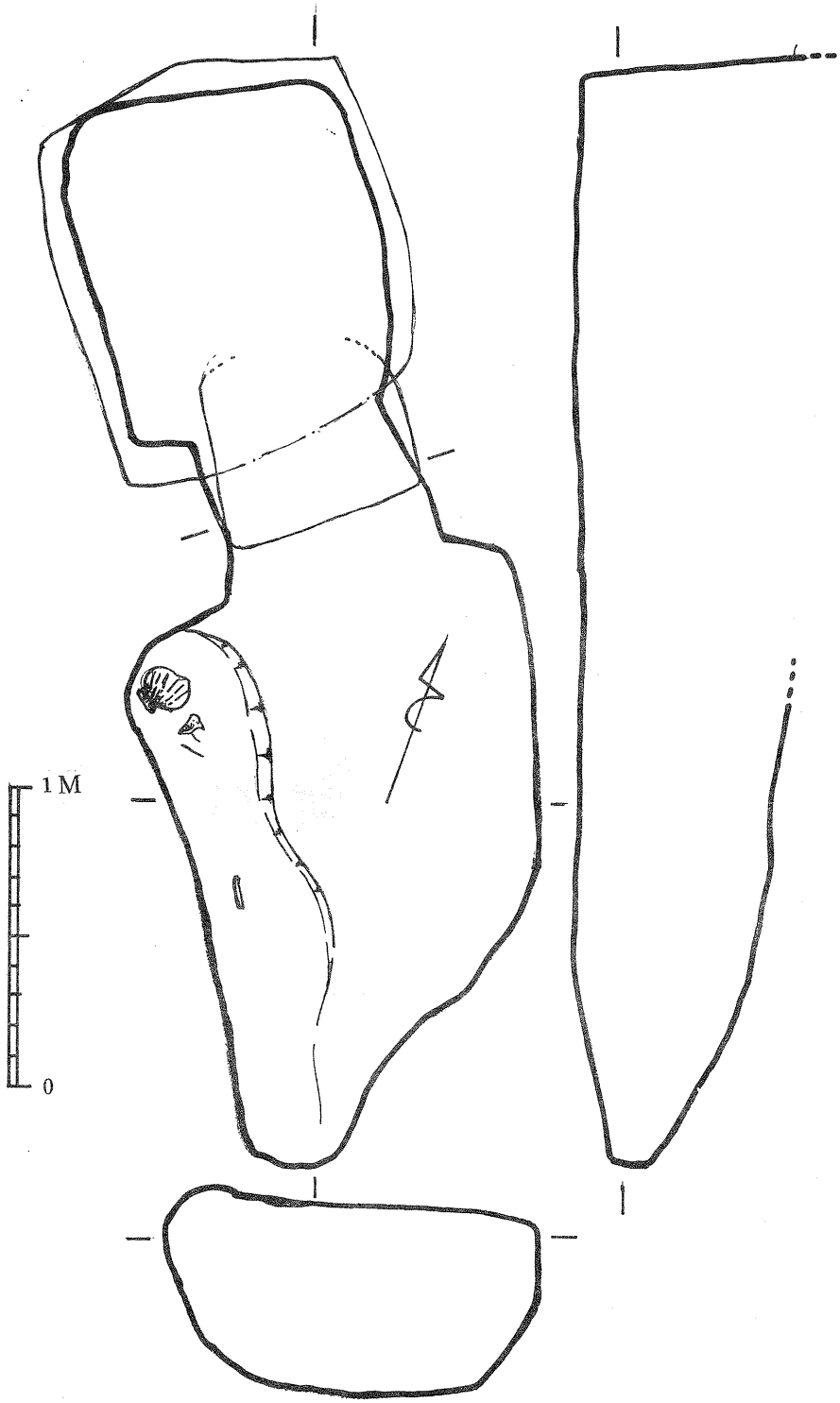
屍床に遺存した人骨は１体分で、頭蓋骨左側面部分と、肩甲骨片、肋骨片、脛骨残片であり、かろうじて原形を保っている状態であった。頭蓋骨残片で注目されたのは、頭骨を覆うように１cm間隔で縦列する幅１mmほどの有機物の黒線が数条付着していたことである。このような黒線の付着は、須木村上ノ原９号地下式横穴の人骨の竹製櫛の櫛歯痕の例がある。（註２）当遺構には櫛の検出がないだけに、直に櫛歯と断定することができないが興味ある徴証であった。

当遺構からは何等の副葬品も検出されなかった。羨道から玄室の前半にかけて陥没していたこともあって、羨道の閉塞については明らかでない。礫石や土塊等閉塞に関るものが検出されなかつたことは３０号と同様である。当遺構も当然六野原地下式横穴群に共通する閉塞形態がとられていたものとおもえる。

（茂山　護）

（註１）　西都市上三財字元知原に所在。45年１月に基盤整備事業で７基の遺構が発見調査された。長方形妻入家形の５号墓以外は全て、片袖逆P字形の構造をとっており、元知原地下式横穴群の一つの型として位置づけられるものである。　日高正晴氏　調査（未報告）

（註２）　岩永哲夫・茂山護「上ノ原地下式古墳発掘調査」（「宮崎県文化財調査報告書」第２２集）1981



第6図　六野原地下式横穴３１号　実測図

Ⅳ 遺　　物

1　須恵器と土師器

当地下式横穴の須恵器と土師器は、いずれも竪坑上部付近より検出されたものである。

地下式横穴の竪坑上部及びその周辺から、葬送儀礼に伴う供献土器と考えられる須恵器や土師器の出土例は、これまで１１例ほどが知られている。(註１)　当地下式横穴の土器類も竪坑上部における供献土器の一部と考えられる。

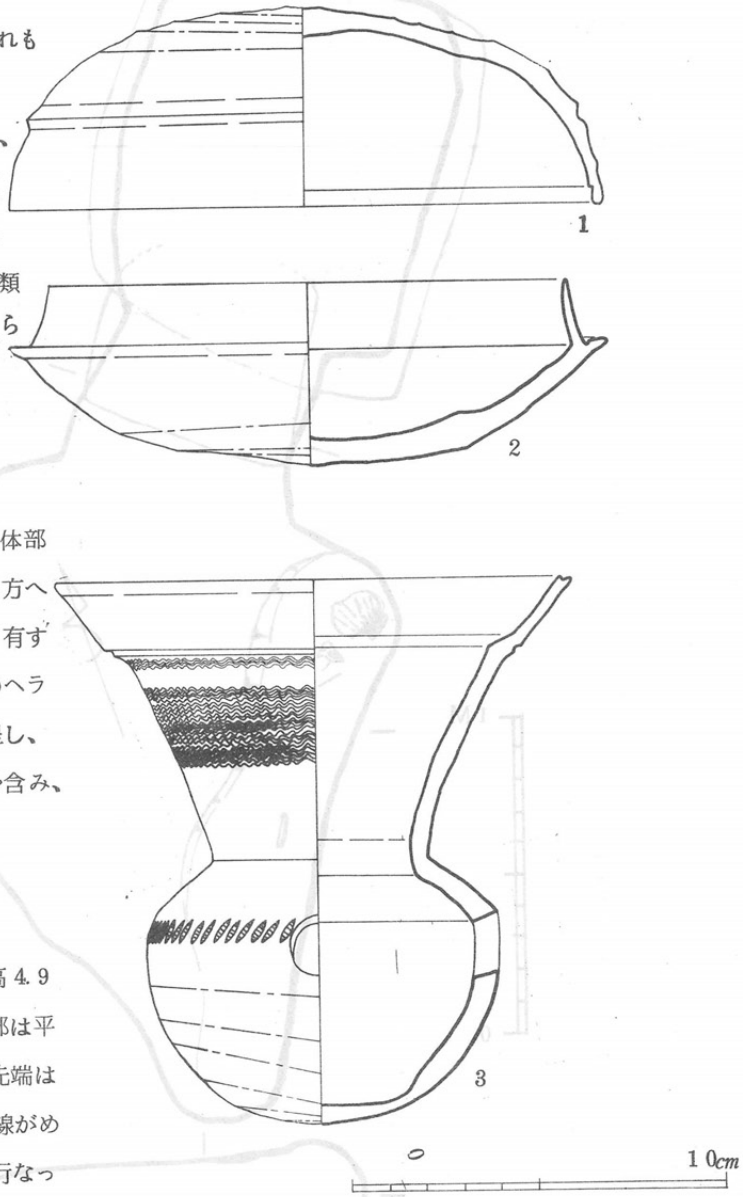
１）須恵器

蓋（第７図１・図版２）

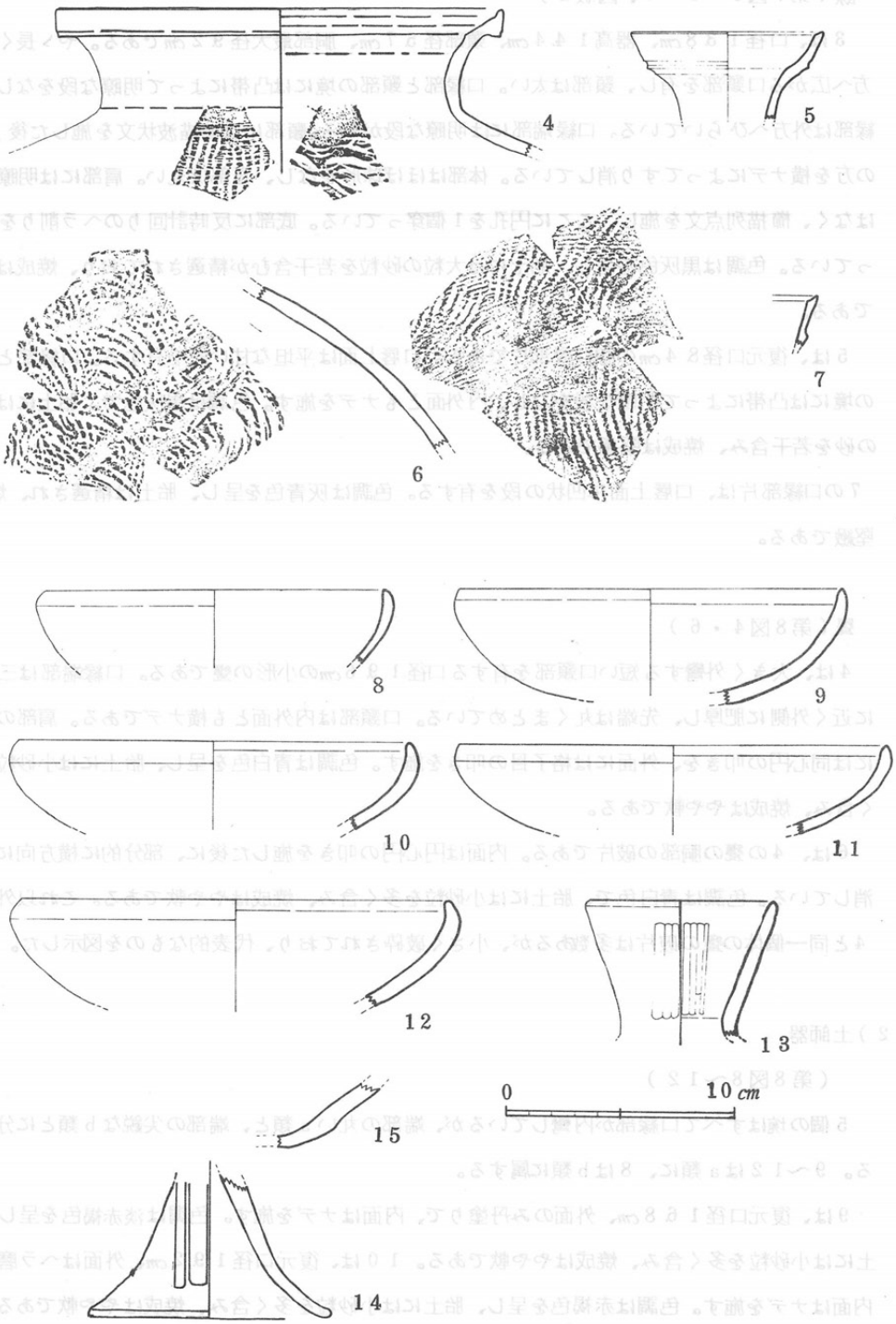
口径１５.８cm、器高５.３cm、天井部と体部の境には明瞭な稜がある。口縁部は下外方へ伸び口縁端部は丸く、内側に明瞭な段を有する。天井部の約２分の１に反時計回りのヘラ削りを行なっている。色調は灰青色を呈し、自然釉がかかる。胎土には大粒の砂粒を含み、焼成は堅緻である。

身（第７図２・図版２）

口径１３.８cm、受部径１６.０cm、器高４.９cm、立ち上がりは直立気味に伸び、端部は平坦である。受部は外上方へ伸び、受部先端は丸くおさめ、受部の上面には一条の凹線がめぐる。底部には時計回りのヘラ削りを行なっている。色調は灰青色を呈し、胎土には大粒の砂粒を多く含み、焼成は良好である。



第７図　六野原地下式横穴３０号
出土須恵器　実測図



第8図　六野原地下式横穴３０号出土土器実測図

瓿（第7図3・5・7、図版2）

3は、口径13.8cm、器高14.4cm、頸部径5.7cm、胴部最大径9.2cmである。やゝ長く外上方へ広がる口頸部を有し、頸部は太い。口縁部と頸部の境には凸帯によって明瞭な段をなし、口縁部は外方へひらいている。口縁端部には明瞭な段がある。頸部には櫛描波状文を施した後、上位の方を横ナデによってすり消している。体部はほぼ球形をなし、底部は丸い。肩部には明瞭な稜はなく、櫛描列点文を施し、ここに円孔を1個穿っている。底部に反時計回りのヘラ削りを行なっている。色調は黒灰色を呈し、胎土には大粒の砂粒を若干含むが精選されており、焼成は堅緻である。

5は、復元口径8.4cmの瓿口縁部片である。口唇上面は平坦な甘い段を有する。口縁部と頸部の境には凸帯によって明瞭な段をなし、内外面ともナデを施す。色調は黒灰色で、胎土には大粒の砂を若干含み、焼成は堅緻である。

7の口縁部片は、口唇上面に凹状の段を有する。色調は灰青色を呈し、胎土は精選され、焼成は堅緻である。

甕（第8図4・6）

4は、大きく外彎する短い口頸部を有する口径19.6cmの小形の甕である。口縁端部は三角形に近く外側に肥厚し、先端は丸くまとめている。口頸部は内外面とも横ナデである。肩部の内面には同心円の叩きを、外面には格子目の叩きを施す。色調は青白色を呈し、胎土には小砂粒を多く含み、焼成はやや軟である。

6は、4の甕の胴部の破片である。内面は円心円の叩きを施した後に、部分的に横方向にナデ消している。色調は青白色で、胎土には小砂粒を多く含み、焼成はやや軟である。これ以外にも4と同一個体の甕の破片は多数あるが、小さく破砕されており、代表的なものを図示した。

2）土師器

（第8図8～12）

5個の埦はすべて口縁部が内彎しているが、端部の丸いa類と、端部の尖鋭なb類とに分かれる。9～12はa類に、8はb類に属する。

9は、復元口径16.8cm、外面のみ丹塗りで、内面はナデを施す。色調は淡赤褐色を呈し、胎土には小砂粒を多く含み、焼成はやや軟である。10は、復元口径19.2cm、外面はヘラ磨き、内面はナデを施す。色調は赤褐色を呈し、胎土には小砂粒を多く含み、焼成はやや軟である。

11は、復元口径18.8cm、内外面とも丹塗りされ、内外面ともヘラ磨きを施す。　色調は黄

褐色を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。

１２は復元口径18.8cm、内面はナデ、外面はヘラ磨キを施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には小砂粒を多く含み、焼成はやや軟である。

８は、復元口径１4.8cm、内外面とも丹塗りで、外面はヘラ磨き、内面はナデを施す。色調は黄褐色を呈し、胎土は精選され、焼成は良好である。

坩（第８図１３）

口径8.0cmの坩の口縁部で、斜め上方へ口縁部は伸び、端部は丸くまとめている。内外面とも縦方向のヘラ磨きを施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には小砂粒を若干含み、焼成は良好である。

高坏（第８図１４・１５）

１４は、底径１0.6cmの脚部片で、脚部端部は丸くまとめている。外面は縦方向のヘラ磨きを、内面にはナデを施す。色調は暗赤褐色を呈し、胎土には大粒の砂を多数含み、焼成は良好である。

１５は、１４の坏部片で、外面にはハケ目を施す。色調は黄褐色を呈し、胎土には大粒の砂を含み、焼成は良好である。

2　鉄　製　品

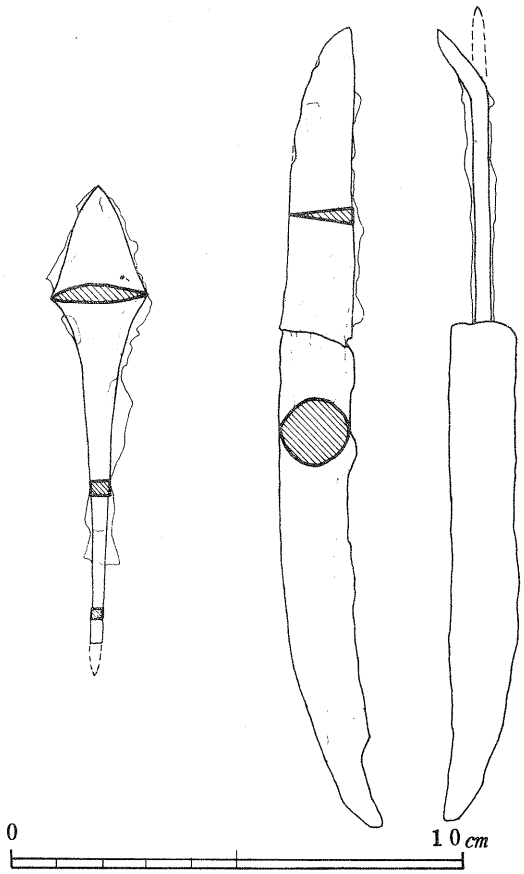
玄室内より刀子１、鉄鏃１が出土している。

１）鉄鏃（第９図１・図版２）

鏃頭三角形を呈する平根菱形鏃である。全長１0.1cm、幅2.3cmを測り、レンズ状の断面である。重量１３g。

２）刀子（第９図２・図版２）

刃部長6.8cm、鹿角装柄部１１.0cm、全長１7.8cmの鹿角装の刀子である。刃部先端は折れ曲がっている。



第９図　六野原地下式横穴３０号出土鉄器実測図

3 小　　結

当地下式横穴の竪坑上部に検出された須恵器の時期は、坏蓋・身に関しては、小田富士雄氏編年の第ⅢA期に相当する。(註2) 特に坏蓋は、天井部と体部の境に明瞭な稜や、口縁端部内側の段に見られるように古式の特徴をよく残しており、馬頭3号地下式横穴出土の坏蓋(註3)よりも古い特徴を有する。䑛は、小木原1号地下式横穴の竪坑上部に出土した䑛(註4)と同タイプであり、第Ⅱ期と第ⅢA期の境に比定される。(註5) 䑛の口縁部片7は、口唇上面の明瞭な段に示されるように3よりも古式の特徴を示しており、第Ⅱ期に遡る可能性もある。

以上のように、当地下式横穴の竪坑上部出土の須恵器は、Ⅱ期に遡る可能性のある古式須恵器の断片も含まれてはいるが、全体的には第ⅢA期に相当する器体が主であり、須恵器に示される年代観は、6世紀中頃に比定される。　（長津宗重）

（註1）　岩永哲夫「日守地下式古墳群調査報告」
（『宮崎県文化財調査報告書』第24集）1981

（註2）　小田富士雄「中尾谷窯跡群の調査 ― 第Ⅲ期須恵器」
（『八女古窯跡群調査報告』Ⅱ）1970

（註3）　石川恒太郎「馬頭遺跡」
（（『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)』）1972

（註4）　日高正晴「小木原古墳」
（『九州縦貫自動車道埋蔵文化財調査報告(1)』）1972

（註5）　福尾正彦「宮崎県内出土の須恵器 ― 地下式横穴・高塚古墳出土例を中心として」
（『古文化談叢』第6集）1979

V 結　　語

今回の六野原３０・３１号墓の調査は、昭和１７・８年調査の六野原地下式横穴群２７墓に新たな資料を加えただけでなく、字源六原の地にも遺構の存在を明らかにし、六野原台地の地下式横穴群に従来より地域的広がりのできる可能性を示したことで貴重であった。かっての飛行場建設から戦後の開拓、そして新しい営農地区建設と幾多の大規模な削平整備を受けたにも拘らず、４６年の桃木畑(註１)５０年には吹上、そして今回の源六原と、断続的ではあるが遺構の発見が続いているわけである。(註２)このことは、とりもなおさずなお多くの遺構埋蔵の証しであり、２７基をもって六野原地下式横穴群の全てを断定できないことを裏付けるものといえよう。(註３)それは、地下式横穴に限らず今回の遺構周辺畑地での塞ノ神式土器片の表採からも明らかなように縄文、弥生、古墳にわたる多くの遺物・遺跡の包蔵を示唆するものである。地中に遺された古代人の生活の軌跡が無作と湮滅されることのないことを願うものである。

今回調査した地下式横穴２基は、構造上は竪坑・羨道・玄室の長軸が縦列する長方形妻入型の範疇に属し、屍床の存在からすれば、石川分類のⅠ式「妻入型有屍床式」(註４)に類別される遺構であった。ことに３０号が著明である。六野原地下式横穴群の中ではこれまで１０号・８号・２号がこの形式を代表していたが、ここに３０号を加えることになった。

ところで、同じ妻入形有屍床式といっても玄室全長５ｍ以上を測り、その占有面積９７㎡を越す１０号や８号と、全長３.３ｍ、占有面積５９㎡の２号とでは規格上だけでなく、その副葬品の内容においても甲冑・刀剣・鏃・鋤先・鏡・管玉をもつ１０号や８号と、直刀、鏃・斧の２号墓とでは歴然とした格差が認められる。３０号の場合は構造規格上は、玄室の全長３.５ｍ、占有面積９７㎡と２号に次ぐ規模を示す。しかし、玄室天井に極木状線刻を施し明瞭な家屋構造を造る２号と、天井をドーム状に造出し、竪坑、玄室の中心線の屈折した３０号とでは構造上の格差は明瞭である。さらに副葬品の組合せでも鉄鏃と刀子各１本の３０号とでは一段階の格差が窺える。

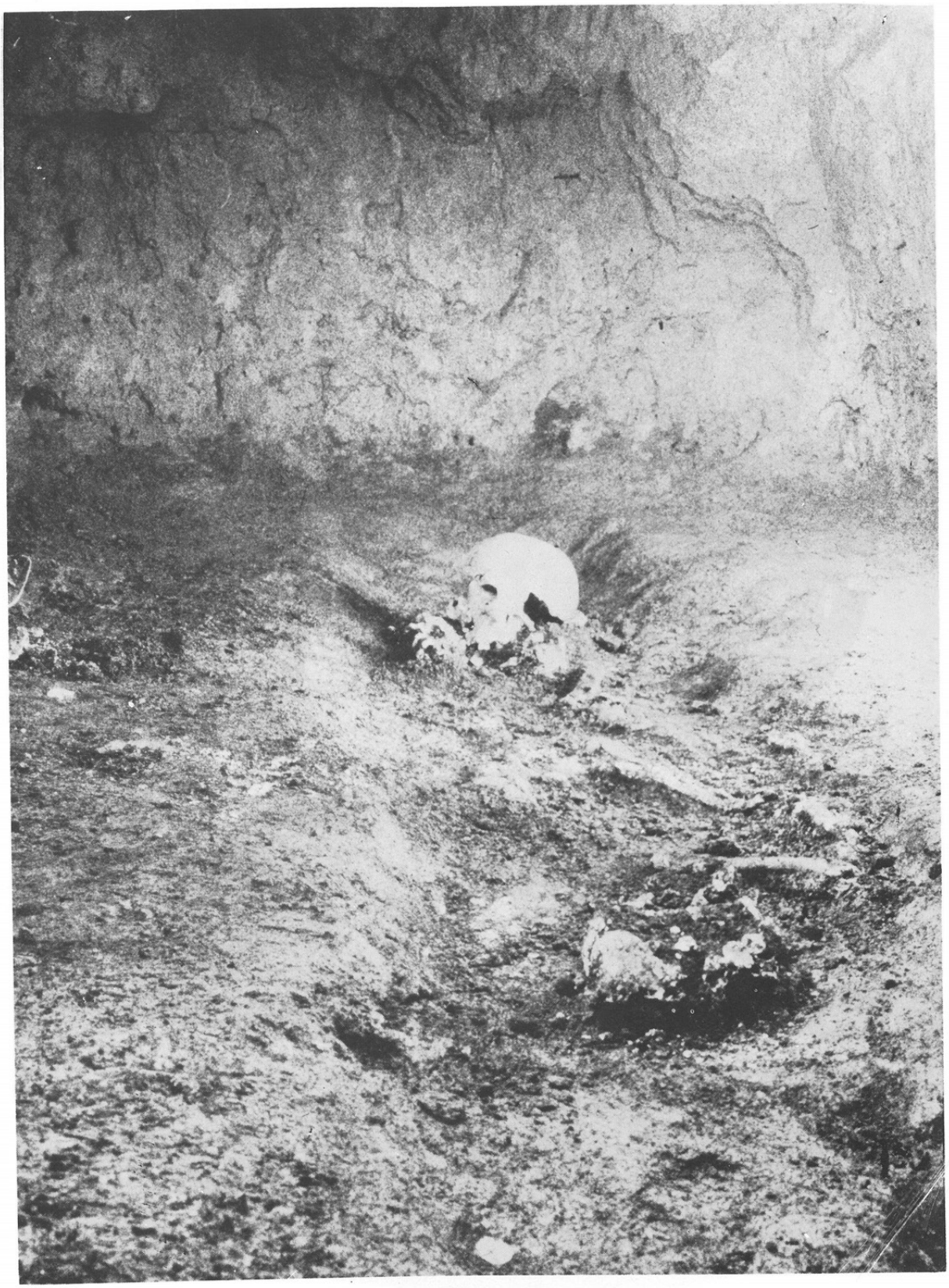
このことは、もっとも曲型的な妻入型有屍床式の８号や１０号と３０号との間には２段階の格差となるわけで、六野原地下式横穴群の妻入型有屍床式の遺構間には８号・１０号→２号→３０号の縦列の関係が確認される。この縦列関係が、同時に時期差をも示すものかについては、同様の格差をみる下北方地下式横穴４号と５号のようにほぼ同時期の築造と判断されている例もあり、(註５)(註６)一概に断定できない。(註７)だが、今回３０号では竪坑上部から葬送儀礼に用いられ、祭祀後に破砕遺棄されたものと考えられる須恵器や土師器が検出された。須恵器に与えられたⅢＡ期の年代観が、３０号の築造年代を示すものであれば、８号、１０号の副葬品の組み合せに示される年代との間には明らかに時期差が認められる。このことは、８号、１０号のような第一級の遺構と、３０号級の遺構とでは、明らかに構

造上の格差と時期的推移に相関関係が認められることを示した。しかし、２号と３０号、或は２号と８号との時期差についてはなお検討を要する。ここで留意すべきことは、所属集団と群構成の違いである。即ち六野原古墳群は８号・１０号の所属するⅠ群と、２号・３０号の群集するⅡ群とに分けられる。Ⅰ群には、１０号の墳丘と考えられる１０号墳以外に全く高塚古墳がないが、Ⅱ群の方は、９基の高塚古墳があり、これと混在するように地下式横穴が分布していることである。そして８号と10号、２号と３０号は、それぞれ所属群の主軸となっていることも見逃せない。これは、両群の格差とも関わることであり、高塚を容しないⅠ群の８号・１０号は、副葬品の内容からは、高塚古墳の中枢たる６号墳と対応し得るだけのものがあり注目される。群の格差とも関連し、Ⅱ群の中での２号と３０号の位置づけは、六野原古墳群全体の成立過程とも関連し検討さるべき課題といえよう。

（茂山　　護）

（註１）　日高正晴「宮崎県桃木畑地下式A号墳」
（「古代学研究」６４号抜刷）
（註２）　岩永哲夫「吹上地下式古墳発掘調査」
（「国富町文化財調査資料」１集　　１９８０
（註３）　石川垣太郎「地下式古墳の研究」　１９７３
（註４）　註３に同書
（註５）　石川垣太郎「宮崎市下北方地下式古墳調査報告」
（「宮崎県文化財調査報告書」第１６集　１９７２
（註６）　「下北方地下式横穴５号」
（「宮崎市文化財調査報告書第３集））　１９７７
（註７）　福尾正彦「日向中央部における地下式横穴とその社会」
（『古文化該　』　第７集　１９８０

図版１　六野地下式横穴30号出土遺物　ー須恵器・刀子・鉄鏃



図版 2　六野原地下式 30 号玄室内部